
魔法少女リリカルなのはCordis

Arishia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはCordis

【Nコード】

N8434S

【作者名】

A r i s h i a

【あらすじ】

男は孤高だった。

それは誰にも頼らない強者の力。

女は孤独だった。

心を手に入れてから逃げ出してしまう弱者の心。

だからこそ男は他人を嫌い、女は自分を嫌った……

それはまるで鏡のような存在、何から何まで真逆でありながら同じような存在。

ゆえに彼は彼女を嫌った。

ゆえに彼女は彼に憧れた。
だからこそ彼は彼女を拒絶し、彼女は彼になろうとした。

新暦75年 彼は一人の女性と出会った。

第一話「開幕」(前書き)

どうして投稿したのかって？

そこにネタがあったからだよ！

ごめんなさい冗談です、Nightmareも執筆するんで許してください！！

第一話「開幕」

「なのはママ！ フェイトママ！ 早く！」

「はいはい」

「そんなに急がなくても大丈夫だよ？」

ミッドチルダを騒がせたJS事件から一月ほど経ったある日、私達は休みを利用して三人で街に出かけていた。

すでに事件を解決したとはいえ、その後の被害状況や更正メンバーの処遇など、主に書類上の仕事で治療のための休養を除けば初めてのお休みだ。

あの時の戦いもかなり厳しかったけれどその後の仕事の量は精神的な意味ですごいダメージを受けたのは間違いなかった。

「こうしてヴィヴィオと一緒に出掛けられるまで、長かったね」

「本当にね……フォワードのみんな大丈夫かな？」

主に書類仕事の意味で、ティアナとかはああいうのをさくさくこなせてしまっけれどスバルは前から結構苦手だったから正直不安ではある。

「まあ、明日はフォワード陣がお休みだからあと少しだけ頑張ってもらおうよ」

「そうだね」

私は思わず大きく息を吐きながら答える。

明日になればフォワード陣はお休み……それは逆を言えば明日は私たちの仕事があるということだ。

(教導官の仕事もあるし……やっぱり大変だなあ……)

内心ではそんなことを思ってもやめるつもりはない。

昔の私みたいに無茶をして自分のやりたかったこと、空を飛ぶことができなくなるような悲しい目に遭ってほしくないから私が続けていることだから……

「早く〜!」

「ほら、なのは。ヴィヴィオが待ってるよ?」

「……そうだね、急ごうか? フェイトちゃん」

『なのはちゃん! フェイトちゃん!』

走り出そうとした私たちの足を止めたのははやてちゃんからの念話だった。

「はやて? どうかしたの?」

真剣みの帯びたはやてちゃんの声にフェイトちゃんが戸惑いながらも聞き返す。

『すごく頼みにくい事なんやけど、フェイトちゃん達の近くで魔導師の転移反応があったんや……时期的にも場所的にも問題がおきへんように一応見てほしいんやけど……』

はやてちゃんが言い辛そうにしているのはたぶん、ヴィヴィオのことだろう。

仕事ばかりで最近ではつきっきりになってあげることができなかつたから……ということでもいくらか余裕の出来はじめた今日、私達に優先的に回してくれたぐらいだったから……

『フェイトちゃん、私が少し様子を見てくるからヴィヴィオをお願
い』

『了解、無茶しないでね？』

フェイトちゃんがヴィヴィオの方へ駆け寄る姿を眺めながら私は飛
行許可を得てすぐに飛び立った。

「折角の団らんを邪魔されちゃったんだからたっぷりとお話ししな
いとね、レイジングハート？」

『そうですね』

私達はそんな軽口をたたきながら魔導師の転移反応のあった場所へ
と急いだ。

人気のない路地裏……そこに転移したのは一人の血まみれの青年だ
った。

「…………鬱陶しいな」

少年はそれだけ吐き捨てると手についた血を振り払った。
その血は彼のものではなく、何かの血を浴びたものだということを
知るのには普通は無理だろう。

「なに？　もしかして手負いなのかな？」

「……………」

青年の前に現れたのは十人いたら十人は振り返るであろう優男。
普段ならばその笑みはさわやかなものなのだろうが青年にとっては
不快以外の何ものでもなかった。

「失せろ……………ぶち殺すぞ？」

「いいねえ……………強者の強みってやつ？ それとも唯一の成功例とし
ての威厳って奴なのかな？」

男はひとしきり笑うと今までの笑みを消し、まるで獣のような獰猛
な笑みを浮かべた。

「ただど僕には君が必要なんだよ……………君の血も、君の肉も、君の細
胞も……………全部含めてね」

「……………いいだろう、殺してやるよ」

男が構える姿を見て青年が戦闘態勢に入ろうとした瞬間に間に割っ
て入る存在が現れた。

「機動六課の高町なのはです！ そこにいる彼を傷つけたのはあな
たですか！？」

管理局のエースオブエース、高町なのはだった。

「傷つけたのは僕じゃない……………他の誰かだ。もっとも 今彼を
傷つけているのは君自身だろうけどね」
「っ！？」

男の言葉になのはが驚いて少年の方を振り向くと青年は何かを堪え

るかのように胸のあたりを強く握り、荒い息を吐いていた。

「だ、大丈夫ですか!?!」

「うるさい!?!」

なのはは青年に突き飛ばされたが急には認識できなかった。

なぜ突き飛ばされたのかも、なぜ彼が辛そうなのかも分からなかったからだ。

「あつはははは! 羨ましいねえ……その反応、正常な成功例の証だよ」

「その口を閉じろ、十秒で沈めてやる」

男は獰猛な笑みを浮かべたまま一気に距離を詰める。

まるで獣のような……否、実際にそれくらいの速さだったのだろう。少なくとも普通の人間だったらその初動さえ認識することはできない、あくまでも普通の人間だったら……

「………温い」

それだけ。

たったその一言で青年の周囲には触手が出現し、高速で接近していた男の動きを止める。

「がはっ!?!」

突然動きを止められた男は慣性の法則によって意識を飛ばしかけたが青年はそこからさらに止めを刺した。

「失せる 貴様ごとき、喰らうにも値しない」

青年の言葉に従うように男の首や手、足に胴体に絡みついていた触手はその力を強め……そのまま男を絞殺した。骨は粉々に砕け、血はまるでジュースのように滴り、肉はひき肉のように圧縮された。

「え……?」

なのは目の前で起きたことをそんな間の抜けた声を上げることではしか反応できなかった。

青年はそのわずかな言葉を耳にしたのかゆっくりとなのはの方へ振り向く。

その眼は例えるならば獣。

ただ本能のままに生を謳歌する孤高の生物。

緩慢な動きで青年はなのはに近づくがなのははまるで金縛りにでもあってしまったかのように身動き一つとれなくなってしまっていた。これから起こるであろう事態に反射的に目を閉じ身を竦ませた。

「っ!」

青年の周りに出現している触手はゆっくりと動きだし、目標の首に絡みついた。

「やれ」

その一言で触手は一気に対象を締め上げ、意識を失わせた。

いつまでたってもやってこない衝撃にゆっくりと目を開くと目の前の血まみれの男の人が触手に首を絞められていたところだった。何があったのかはわからない、どうしてこうなっているのかも分からない……ただ分かることと言えばこのままでは目の前の男の人は死んでしまうということ。

「レイジングハート！」

『アクセルシューター』

男の人の首を絞めていた触手を根元から撃ち抜き、落ちてくるのにそなえてしつかりと抱きかかえる。

思っていた以上に重くて、一瞬だけよろけそうになるけれどレイジングハートがフォローしてくれたおかげで何とか倒れずに済む。

私は慌てて男の人の容体を確かめると静かにはあるけれど確かに呼吸をしていて安心した。

「夢じゃ……ないんだよね？」

目を向けたのはすでに原形をとどめていない死体。

これがついさつきまで生きていた人だったなんて誰も信じられないだろう。

私自身、目の前で見ていたのに実感がわかないくらいだった。

「……とにかく、はやてちゃんに連絡しないと、ね」

考えることは山ほどあるけれど今はそんなことを考えていられる余裕なんてなかった。

私は急いではやてちゃんに念話をして今の状況と重体の人がいることを告げると、はやてちゃんは少しだけ考え込んですぐに私に指示を出した。

『とりあえず、現場に関してはシグナムとヴィータを送るからなのはちゃんはその重体の人を急いで機動六課に連れてきてな！ 機動六課ならシャマルに頼めばちゃんとした治療が受けられるから！』
「うん、分かった」

私ははやてちゃんに言われた通り急いで機動六課に向かった。
医学の知識なんて私にはないし、あっても応急処置程度のことしかわからない。

それでも……ううん、だからこそ私は急いだ。
それは当然のことだと思うし、それに何よりこの人にはまだまだ聞きたいことがあるから……

なのはが私たちと別れてわりとすぐにはやてから戻ってきてほしいという連絡を受けた。
詳しい事情は伝えられなかったけれど六課に戻ってきたら伝えるということだろう。

「フェイトちゃん、ヴィヴィオは？」

「アイナさんに預けてきた、ちゃんとした事情はまだ聞いてないんだけど何があったの？」

「それは……」
「みんなおるか？」

なのはが少し言い辛そうに口ごもっているとはやてが入ってきた。今ここにいるのはシグナムとヴィータを除いた戦線メンバー全員とロングアーチの一部だった。

「大丈夫そうやな、ところでシャマル……あの男の人の容体はどうなんや？」

「気絶しているだけだから大丈夫、たぶん明日の朝ごろには目を覚ますんじゃないかしら？」

シャマルの言葉になのはは私の隣で安堵の息を吐いた、やっぱりなのはとしても気が気じゃなかったんだろう。

「はやて、私はなのはが重体の人を見つけたことしか聞いていないんだけどどういう経緯でそんなことになったの？」

「せやな……なのはちゃん、とりあえず状況の説明をお願いしてええかな？」

「……うん」

なのははゆっくりと立ち上がって全員を見回した。

そして自分を落ち着けるために一度だけ深呼吸をして話し始めた。

私と別れてからなのはが遭遇したすべてのことを

「ザフィーラ！ レッツゴー！」
「……………」

蒼い狼に乗りながらヴィヴィオは高らかに宣言した。
特にすることはない。

あえて言うのなら洗濯物を畳み始めたアイナの邪魔にならないようにザフィーラがいつもその時を見計らってヴィヴィオを連れ出して機動六課の中を歩き回るだけだ。

アラートなどがあればザフィーラも現場に出ることもあるがつい最近大きな事件も解決した直後と言うこともあり警備がより厳重になりわざわざ呼び出されるほどの事態も起こらないし、機動六課自体が基本的にロストログアを専門に扱っているので現場に出ることはない……もつともそれゆえに書類仕事が増えていることは仕方のないことだが……

「ふんふんふん」

「ずいぶんと機嫌がよさそうだな？」

事件に巻き込まれたことで折角の親子のお出かけも中止になったのにも関わらず、上機嫌なヴィヴィオを見て不思議に思ったザフィーラが思わず声を出す。

「なのはママがキャラメルミルク作ってくれるんだって！」
「そうか……………」

ザフィーラは短く答えながらもどこか優しい雰囲気を持ちながらヴィヴィオに指示されるままに歩き続けた。

しばらく歩き続けているとヴィヴィオが急にザフィーラの体を叩きはじめザフィーラはそこで足を止める。

「これってなんて書いてあるの？」

「面会謝絶だな……怪我をしている人がいるから入ってはいけないということだ」

ザフィーラがそれだけ答えると面会謝絶と書かれた扉が突然開き、中から見慣れない男が現れた。

「貴様、何者だ？」

「……」

男は何も言わずにザフィーラを一瞥するとすぐに興味をなくしたように辺りを見回した。

「……飯の食える場所を知らないか？」

あまりに自分勝手な言葉にザフィーラは一瞬敵意を露わにしようとしたがすぐにヴィヴィオがいることでそれを避ける。

「え〜っと……食堂ならあっちだよ？ 案内してあげるね！」

ヴィヴィオはそんなザフィーラの思いに気が付くこともなく、目の前の正体不明の男をザフィーラに乗りながら食堂まで案内をする事になった。

「……案内をしているんだ。名前くらい話してもいいのではないのか？」

「……」

男は何も話さずにただ黙々として行った。

ザフィーラ自身もあまり期待していなかったのか気にすることはな

かったが少し間を置いてから男は口を開いた。

「クラウド……クラウド・アフェクトウス」

男は……クラウドはそれだけ言うとそれ以上は何も語らずにただファイーラとヴィヴィオについて行った。

第一話「開幕」(後書き)

作者「はい！ 新主人公クラウド君です！」

クラウド「……………」

作者「えっと……………」

クラウド「……………」

作者「なんかしゃべって……………」

クラウド「失せろ」

作者「酷い！？」

クラウド「そもそもこんなところに俺を呼ぶのが間違いだ」

作者「……………他の作品もそうだけど私の小説の主人公たちってキャラが恐ろしいほど被らないなあ……………」

クラウド「興味ないな」

作者「これはこれで精神的にくる……………次回もお楽しみに……………」

第二話「名前」(前書き)

意外と執筆時間ってとれないものですね……
空き時間が少ししかないとそこでやるわけにもいかず少しまとまった時間で書くから執筆が遅れるという展開……学校もバイトも結構ハードだなあ……

……夏休みはまだですか？

第二話「名前」

「とまあ、今分かっているのはこれだけやな……あとはシグナムとヴィータの報告待ちやけど……」

はやてちゃんはそれだけ言うと私たちに質問がないか確認するように一度辺りを見渡したけど、声を出す人は誰もいなかった。

はやてちゃんはそんな私たちを見て一度大きく頷くとゆっくり席を立ちあがった。

「とりあえず私達機動六課は基本的には平常通りの勤務、怪我した人に関しては基本的にシヤマルに任せるけどええかな？」

「ええ、分かったわ」

シヤマルさんはそれだけ言うときさっそく席を立ちあがっていつものように医務室へと向かって行った。

唯一変わったことと言えば恐らくあの男の人のことくらいだろう……

『主はやて、よろしいですか？』

「どうしたんや？」

開かれた回線に写ったのは私と入れ替わりに現場へと向かってくれたシグナムさんだった。

報告をしに来たってことはたぶんさっきの事件についての簡単な説明をしてくれるのだろうと思ったのだけれどそんな私の考えは思いもよらない方向で裏切られることになった。

「それが……死体がどこにもないのです」

「死体がない？」

「そんなことあるわけないよ!！」

思わず怒鳴るような声になってしまったことに気が付いたけれどそんな簡単には止められない。

私は間違いなく自分の目で人が殺されてしまうところを目にした…
…夢なんかじゃなくてひどく現実離れたような事件を確かに目撃した。

「なのはちゃん、ちょっと落ちつくんやで? ……場所とかは間違っ
つてないんか?」

「間違いねえと思うよ」

もう一つの回線が開くとその先にいたのはヴィータちゃんだった。

「なのはの言っていた場所についたらすげえ量の血が辺りに広がっ
てたからな……間違いなく動けないほどの重体のはずなんだけど…
…」

ヴィータちゃんは乱暴に頭を搔きながら不機嫌そうな顔をしていた。

「せやな……考えられるんは誰かが動かしたってところやろうけど
……どうしてそんなことをしたのが全く分からへんな……」

「一応、もう少し調べてみてから戻るつもりです」

シグナムさんの言葉にはやてちゃんは小さく頷いて回線を切った。
はやてちゃんは立ち上がっていた体を再び椅子に預けて腕を組みな
がら考え込み始めた。

「襲われた人は動けへんほどの重体のはずなのに姿はなし……フェ
イト執務官、この状況をどう思う?」

フェイトちゃんは少し考える仕草をしながらゆっくりとはやてちゃんの方に近づきながら言葉を紡いだ。

「やっぱり普通に考えたら誰かが移動させたんだろうね……実際に血の痕だつてあるんだからなのはが見間違えたつてことは考えにくいから」

「やっぱりそうやるうな……」

はやてちゃんはぼんやりと天井を眺めると少ししてから私たちの顔を見回して口を開いた。

「はやてちゃん！」

だけどそれは慌てて飛び込んできたシャマルさんによって遮られた。そんな姿をはやてちゃんは窘めようとするけれどシャマルさんの言葉に私たちの空気は凍ってしまった。

「なのはちゃんが連れてきた子がどこかに行つちやつたのよー!」

「なっ!? 重体だつたんじゃないんですか!？」

ティアナの言葉にシャマルさんも混乱しているのか状況を把握し切れていないのかただ同じことを繰り返すばかりだった。

「六課からは出ていないの？」

「それは確認したけど今のところは特に出入りはなかったみたい……」

…

フェイトちゃんの言葉に少し落ち着いたのかゆっくりとした言葉で答えるシャマルさんを見てフェイトちゃんは微笑んだ。

多分シャマルさんを落ち着けるためにやんわりと確認したんだろうな……私も一緒に乗っておいた方がいいのかな？

「はやてちゃん、六課の中だったら私が探すよ。元々お休みだったから今日の分の仕事もちょうどなかったし……」

「私も。なのはと一緒に探すよ」

「せやな……折角のお休みで申し訳ないけど頼むな？」

「了解！」

私とフェイトちゃんはちよつと笑いながら敬礼をして行方不明になったあの人を手分けして探すことになった。

「……旦那、これはどういう状況なんだ？」

「私に聞くな……」

「みんな〜！ 頑張つて〜！！」

ヴィヴィオが応援しているのは六課に勤めている局員たちと見慣れない一人の男の食事風景だった……つつてもかなり異様な光景だ。

「も、もう……無理……」

「あと少し！ あと少しだけ頑張ってくれ！！」

「ノルマは一人十皿以上だぞ！！」

まるで何かに追われるようにかきこんでいるのに対して見慣れない男は一人で局員たちをはるかに上回る量の皿が積み上げられていた。スバルやエリオを見ていてこういう光景には慣れていると思ってい

たけど上には上がいることを思い知らされる光景だった。

「ヴァ、ヴァイス陸曹……助けてください……」

「これはどういうことなんだ？」

とりあえず助けを求めてきた今にも倒れそうな局員を介抱しながら俺は状況の説明を求めた。

「じ、実は……」

局員の奴の言葉を整理するところだ。

食堂に集まっていた局員のメンバーはシグナム姐さんに模擬戦でかなり厳しくしごかれていた。

途中で川や花畑が見えたころになってシグナム姐さんは八神隊長に通信で呼ばれて模擬戦は中断。

そして、なんとか動けるようになったメンバーは汗を流すためにシヤワーを浴びてから空腹感を覚えて食堂に来たところで旦那と見慣れない男と出会った。

その男は何でもいいからとりあえずたくさん食べたいみたいなのを言ったらしく面白かった彼らは大食い勝負を持ちかけ、負けた方は全額自腹と言うことにして……

「うう……」

「うえっぶ……」

「もう……無……理」

「……」

この有り様だ。

ちなみにこの賭けに一人で立ち向かっている件の男は相も変わらず黙々と食べ続けていた。

ここまで来ると気味が悪い……

「なあ、あんた……もうそれくらいにしておいた方が……」

男は興味なさげに俺を一瞥するとすぐにまた食べ始めながら答えた。

「賭けを提案してきたのは向こうだ、俺がどれだけ食べても文句はないだろ？」

「そりゃ、そうかもしれないけどねえけどよ……下手したらこいつらじゃ払いきれないってことになるかもしれないぜ？」

「そんなの……こいつらが提案してこなければならなかったことだろ？」

まあ、正論つちゃ正論だけど……もう少し慈悲みたいなものを持ち合わせていないのか？ こいつは……

「あれ？ これって何の騒ぎ？」

「あ、なのはさん。実は……」

俺が説明をしようとしたところでなのはさんの視線が隣に立っている男に向いた。

「あ、ああ！？ なんでこんなところにいるの！？」

なのはさんに肩を掴まれながらそう言われた男は少し鬱陶しそうな顔をして短く答えた。

「俺がどこにしようが関係ないだろ」

「重症だったんだからちゃんと休まないと駄目だよ！」

「あの……なのはさん、こいつ結構元気そうでしたよ？」

積み上げられた皿を指さしながらなのはさんに話しかけるとなのはさんは少しの間何も言えずにただ目の前で積みまれている塔のような皿を呆然と見続けていた。

「クラウドさんってすごいんだよ！ 一人でゼーんぶあんなに食べちゃったんだもん！」

「クラウドさん？」

「その男の名だ、クラウド・アフェクトウス……そう名乗っていた」

旦那の言葉にクラウドは何も言わずに静かに目を閉じていた。言うことが特にならないのか、それとも興味がないのかの判断は難しいが恐らくそのどっちかだろう。

「と、とにかく！ クラウド君には一度はやて隊長のところに来てもらつよー!!」

「……面倒だな」

なのはさんはやる気のないクラウドの手を握ると無理やり部隊長室のある方へと引っ張っていった。

なんつーか……すげえやつだよな……

「ヴァ、ヴァイス陸曹……お金を少し貸してください……」

「完全にお前らの自業自得じゃねえか……」

昼食をとっている最中に無理やり引っ張られるままに俺は一つの部

屋の前に立っていた。

さっきのこいつの話から察するにここが部隊長室なんだろうが……

『なんでこんなところに来なくちゃいけないんだ……俺には関係ないだろ』

「クラウド君？　どうかした？」

「……別に」

わざわざ言うのも馬鹿馬鹿しいと思った俺は特に何も言わずに部隊長室に入っていった女についていく。

付き従う必要はないと思うがそうしなればそうしなかつたで面倒なことになりそうだとすぐに理解できたからだが……

「なのはちゃん、連れてきてくれてありがとうな」

「クラウド君、この人が八神はやて二等陸佐……私達機動六課の部隊長だよ」

『そんなことを俺に説明してどうしろって言うんだ？』

そんな俺の気持ちを無視して二人は勝手に話を進めていく。

「一応あれだけの大怪我だったわけやし……一応、医務室に戻ってもらいたんやけど……」

「そうだよね……確かに大丈夫そうではあるけど一応安静にしておいた方がいいと思うな」

『あんたたちに俺の何がわかるって言うんだ……』

思わず頭に手を当てながらため息をつくと思議そうな顔をして俺の方を見てくる。

俺からすればそこで不思議そうな顔をする方が理解できないが……俺には関係のないことだ。

「八神隊長、よろしいですか？」

扉の奥から聞こえてきた声は部屋の主の了承を得るとすぐに入ってきた。

「どうしたんや？ グリフィス君？」

「食堂にある備蓄が少なくなっているようなんです」

「ん？ いつもより少し早いな？」

「あ……」

話し合っている二人が悩んでいる脇で俺を連れてきた女が言い辛そうに俺の方を見る。

誰がどう思おうが関係ないがあまりそんなことをされるのも不快だ。

「言いたいことがあるなら言ったらどうだ？」

「あ、えっと……」

「どうかしたんか？なのはちゃん？」

「えっと……食料が減ったのってクラウド君が食べたからかも……」

俺の顔色を窺うように部隊長に報告するがそんなに言いにくいのなら俺のいない時に言えば済む話だと思う。

そんな嫌がらせのような行動に嫌気がさしてきた。

「一人食べたくらいで大げさやで、なのはちゃん」

「でも、スバルとエリオの二人分よりも一人で食べているんだよ？」

「……部隊長命令で命じます。えっと、クラウド君やったっけ？」

とりあえず私らの部隊の食糧を勝手に食べたからにはその分は働いてもらうからな？」

『そもそも一方的に提案されたんだが……それに金はあいつらが払

うんだらう？』

あまりに理不尽な言い方のため息の一つもつきたくなるが適当に相手をして終わらせた方が手早いだろう。

『どっちにしたって俺がこいつらといる義理なんてないからな……』

「それでええか？」

「……少しの間だ、なおかつ住む場所と食料を提供するなら俺はかまわない」

「その分働いてもらうことになるけどな……よし、それじゃこれからよろしくな？ クラウド君」

部隊長は俺に手を差し伸べてくるがわざわざ応える必要がないと判断した俺はそれを無視する。

「少しは合わせてくれたってええんやないかなあ……？」

「俺はお前たちと合わせるつもりはない、それが嫌なら仕事なんて押し付けるな」

誰かと慣れあうなんて絶対にごめんだ。

そんな面倒で煩わしくて意味のないことをする意義が見いだせない。

「えっと……と、とりあえず、私の教導の手伝いをしてもらうってことでいいかな？」

「……それが仕事なら仕方ないだろ」

俺はそれだけ答えると女の前に出て先に部隊長室から出る。

「あ、私の名前は高町なのは！ なのはって呼んでいいからね……！」
『こつという面倒な奴がいるから俺は関わりたくないんだ……』

部隊長と言いなのはといいこのやつらがこんな奴らだしたら俺
が解雇される日は近いかもしれないと思うと同時に、それまではそ
んな奴らと過ごす日々を考えるだけで頭が痛くなってくる思いを感
じた。

第二話「名前」（後書き）

作者「はい、そういうわけで第二話完！」

クラウド「……………」

作者「ちなみにもうすでにOP、EDのイメージは決まっていますので次回、次々回あたりに紹介できればな、と思っています」

クラウド「……………」

作者「……………主人公さん？何かコメントは……………？」

クラウド「（どうしてそこで俺に振る……………）……………別に」

作者「お願いだからもっとしゃべってよ……………」

クラウド『あんたに文句言われる筋合いはない』

第三話「集結」(前書き)

これを皆さんが読んでいるということはきっと私はバイト中でしょう(実話)

なんてくだらないことを言いながらようやく投稿です。

いやあ、忙しかった。

バイトだとか授業だとか忙しかった！

あとちょっぴりエロ

ゲもゲフンゲフン。

と言うわけで投稿が遅い！！

と思われた方はマジでごめんなさい！

ま、Arishiaだから仕方ないね。

と思われた方は見捨てないでください！

それでは前回の話を読み返すことを推奨しながら第三話始まります。

第三話「集結」

「とにかく！ お前の力を見せてからな！！」
「……………」

ヴィータちゃんの怒声にクラウド君は不愉快そうに眉を顰めるが何も言わずに指定された位置に立つ。
どうしてこういう状況になってしまったのかと言えば少しだけ前の時間に遡ることになる…………

「と言うわけでこれからの訓練はクラウド君にもサポートしてもらうことになりました」
「……………」

相変わらず何も言わないクラウド君の紹介を私が取りまとめてスターズとライトニングの全員に紹介することになった。

「クラウド君のデバイスは今はないけどなしでも戦えるらしいからエリオやスバルは特に見習うようにしてね」
「えっと……………よろしくお願いします！」
「……………」

スバルの言葉にもクラウド君は何も言わずにスバルを一瞥するとすぐに興味を失ったのかのように誰もいないほうを眺める。

「あの、なのはさん。本当にこの人と訓練できるんでしょうか？」

ティアナの言葉に私も不安になるけれど局員でもない人に事務仕事をさせるわけにもいかず、かといって何もさせずに医務室で世話をするにはさすがに食費などがかかりすぎる関係でやってもらえることを順当に考えていった結果が私がやっていった訓練のサポートをクラウド君にもやってもらうということと落ち着いたわけなんだけど……やっぱり訓練内容のデータをまとめることを手伝ってもらった方が良かったかもしれない。

「つーか、お前なんか話せよ。何考えてんのかわかんねえよ」

「……あんたに分かってもらうつもりなんてない」

「何だと!？」

クラウド君の言葉にヴィータちゃんは今にも飛びかかろうとしたけどシグナムさんに止められる。

「放せよシグナム!」

「フォワードに教える立場のお前がそんなことでどうする、少し頭を冷やせ」

「そうだな、そうすれば俺に関わろうだなんて思わないだろう?」

ヴィータちゃんが叫んだのをシグナムさんが注意したけどクラウド君の火に油を注ぐような言い方に遂にはシグナムさんまで巻き込んで事態はどんどん悪化していく。

そんなギスギスとした雰囲気フォワード陣の慌てる感じを見ながら私は一つの提案をした。

「とにかく! クラウド君の力も知っておきたいから訓練の前に模擬戦……お願いしていいかな?」

「一つだけ聞いておきたい……お前にとって戦いとはどういうものだ？」

「……自分が生き残るためならどんなことだってするものだ、たとえ味方を見殺しにしても」

「てめえ！！」

小さいほうの女が今にも飛びかかってこようとすが騎士の甲冑のようなバリアジャケットを纏った女に止められる。

『とはいえ、あいつの方もかなり抑えているみたいだな……』

聞かれたことを素直に答えたことでそんな感情をぶつけられるなんて理不尽だと思わないこともないが最初から仲間だと思っていなければ……敵だと思えば悪意をぶつけられるのは当たり前だと考えられる。

『俺は一人だ……今までも　　これからも』

「それじゃあ……用意はいい？ レディー……」

俺は何も言わずに体を沈める。

手を限りなく地に近づけ獣のような体勢をとる。

感覚を最適化する。

今の俺は獣。大地を駆け、敵を裂き、空を舞い、血肉を喰らう

相対する敵がよりクリアに見える、得物を握りなおした音が聞こえる、敵の魔力が高まることを肌で感じる。

今までと同じだ。

誰かを守るためでもなく、誰かを倒すためでもない……ただ、自分が生き残るためだけに自分の力を振るう。

俺はそれが生き物としての正しい姿だと思うし……あるべき姿だと確信している。

「ゴォー!!」

あたしとシグナムはクラウドをブツ飛ばすために少し離れた位置であいつの様子を見る。
なのはのスタートの合図はついさっき出たばかりとはいえお互いにまだ一歩も動いていなかった……

「なんだ？ あいつの構え……」

『グイータ、気をつける。あの男の気迫……そう易々と倒せそうもないからな』

「分かってるよ、でもこのままじゃ……」

あたしは小さな鉄球を目の前にいくつも出しながらアイゼンを振るう。

「いらねえよ!」

アイゼンによって撃ちだされた鉄球は寸分の狂いもなくクラウドの方に向かって行く。

さすがに非殺傷にはしてあるけど、あたればただじゃ済まねえのは確かだ……少しやりすぎかもしれないけど教える側の奴があんなに生意気なこと言っているんだからこれくらいしたって問題はねえはずだ。

クラウドが少し遅れて後ろに飛び退いたけどそんなことした程度で避けられるほどあたしのシュワルブフリーゲンの精度は低くない。目標地点が多少ずれてもそのままクラウドの方へと追尾し……轟音を立てて直撃した。

「……ちよつと、やりすぎたか?」

『まるで高町だな……』

「うるせえ!」

少しは自覚あったけどわざわざ言われるとなんだか馬鹿にされている気がして思わずシグナムに強く言い返すと……

『ヴェータ!』

「っ!?!」

さっきまであたしのいたところに何かが通り過ぎ、バリアジャケットを僅かに引き裂きながらそのまま勢いを殺さずに距離をとった。

「……」

「あいつ……なんで無傷なんだよ!?!」

あたしに襲い掛かってきたのはついさつき攻撃が直撃したはずのクラウドだった。

『今の奴に魔法を使う術はない……つまり直撃しなかったということか？』

「あり得ねえよ！ あれだけ近かったんだ！ 外すわけがねえ！」
『……そうとも言えないかもしれんぞ？』

シグナムはこちらの様子をうかがっているクラウドの方を観察しながらも構えに隙を見せずにそのまま話を続けた。

『奴がヴィータの攻撃を受けてから反撃にかかった時間は僅か数秒……あれだけの距離をそれだけで詰め、なおかつ跳躍だけでヴィータに攻撃を仕掛けてきた……まるで獣のようにな』

確かにシグナムの言うとおりそれができるのならあたしの攻撃を避けた理由も納得できるし、反撃の速さも頷ける……だけど魔法の力も借りていない状態で出せるような速さじゃねえ。つまり、考えられることは

「稀少技能持ちってことか？」
レアスキル

『可能性の話……だがな』

確定とは言い切れねえけどそれでもあいつの能力が何なのかがイメージできるだけでも大きく変わってくる。
試しておきたい技法や連携もだいたい限定しやすくなるからな。

「シグナム、とりあえずあたしに考えがあるんだけど……」

「うわぁ……………」

「おお……………」

フォワードのみんなはそんな声しか上げられなかった。

だけどそれも仕方のない事なのかもしれない。

どうしてクラウド君が無傷なのか、どうしてあれだけの距離を詰められたのか……………それだけでも容易にできる芸当ではないのはすぐわかる。

『私自身もどうやってそんなことをしているのかは分かっていないんだけどね……………』

当たり前のことかもしれないけど私はまだクラウド君のことを何も知らない……………会ったばかりって言うのもあるけどそれ以上にクラウド君は多分あんまり私たちに自分のことをあんまり話さないイメージがあるからこそ私たちが積極的に関わっていかなくちゃいけないような気がする。

私はその想いを新たに感じて再びクラウド君達の方を見る。

一見するとクラウド君はヴィータちゃんとシグナムさんに挟まれた状態で不利に見えるけれどそんなことを気にも留めていないかのよう
うにクラウド君は目の前に立っているヴィータちゃんだけに視線を
向けていた。

「……………なのはさん、クラウドさんってどうしてあんまり辺りを見渡

「あつ、も、模擬戦終了!!」

クラウド君の決して大きくなく、だけど離れた距離でも聞こえるような声に私は慌てて模擬戦の終了を宣言した。

なのはの模擬戦終了の合図を聞いてから俺は今まで戦っていた相手への束縛を緩めた。

すぐに終わらせるために一瞬で意識を奪い取ったが一瞬だけでもこんなものに頼るのはあまりいい気がしなかった。

『こんな化け物みたいな能力……俺には必要ない』

「クラウド君、お疲れ様」

「別に……疲れてなんかいない」

この程度で疲れていたら一人で戦い抜くことなんてできないと思えば当たり前のことだ、にも関わらずなのは何か考えるような仕事をするとすぐにまとまったのか俺の目を見ながら提案してきた。

「それじゃあ、シグナムさんとヴィータちゃんを医務室に運んだらお話を兼ねて軽く何か食べようよ」

『どつしてそつなるんだ……』

ただでさえ誰かと一緒にいるなんてことしたくないのにどうしてそ

んなことをしなければならぬのか納得のいかない思いを抱いているとなのはそれを悟ったのか怒っているかのように少し語気を強めながら話しかけてきた。

「模擬戦つていったのに気絶させるまで戦ったんだからそれくらいは当然だよ！ それに私たちはこれから仲間なんだからお互いのことをよく知らないといけないからね！」

「仲間……」

俺の嫌いな言葉だ。

誰かに頼るだなんてそんなのは自分が弱い証拠だ。

本当に強い奴なら一人でどんなことでもこなせる……だからこそ弱みなどないし、孤高である。

『とはいえ、なのはたちに理解を求めるのは無理そうだな……』

俺はすぐにその結論に落ち着けると諦めて気絶した二人を医務室に運ぶことを了承した。

なのはは過剰なくらいに喜んでいたが、俺はどうしても馬鹿馬鹿しく思えて早々に医務室へと向かって行った。

書類の仕事にある程度の目途をつけて一息つくと扉を叩かれる音がした。

『そういえばもうそんな時間やったっけ？』

「はやてちゃん。お客さんですか？」

「うん、そうやで　どうぞ、入ってきてください」

入ってきたのは二人の女の子……一人は私たちと同一歳で少し落ち着いた雰囲気でその影響で年上のお姉さんのような子、そしてもう一人はキャロくらいの子で興味深そうに部屋をキョロキョロ見渡している子。

「とりあえず自己紹介してもらってもええかな？」

「はい」「はい！」

それぞれの雰囲気の異なる返事をしながら落ち着いた雰囲気の子の方から口を開き始めた。

「陸士特別部隊のレイチエル・ルクスイリンです。隊長からの命令で今日の事件についてのサポートの為にこちらでお手伝いさせていただきます」

「ありがとうな、隊長さんからは話を聞いてるよ。頼りにしてるな」

「はい」

レイチエルさんはしつかりとした声で返事をする的一步下がって紹介を終える。

本当ならもう少し色々話をしたいところなんやけどもう一人の方がそこまで待ってくれそうもないので私もそれ以上追及せずに目線をもう一人の若い局員に向ける。

「あ！　陸士108部隊から来ましたフレイズ・アインシュです！

えっと、好きな食べ物甘い物全般です！　あとは魔法の訓練を見ているのも大好きです！！　……あっ！　一応ジョーカーって呼

ばれています！」

「元気いっぱいな自己紹介をありがとな」

私が思わずフレイズちゃんの頭をなでるとフレイズちゃんは気持ちよさそうな顔をしながらほんわかした顔をした。

見ているだけで癒される小動物みたいな存在で大活躍するのは間違いなさそうやな……

「フレイズさんのジョーカーって確かE級の実力でしたよね？」

「呼び捨てでいいよ！ あとは愛称でも！ フーちゃんとかフレちゃんとか！」

レイチエルさんはフレイズちゃんのことを微笑ましく見つめ続けなんだか仲のいい姉妹のようにも見えてきた。

「それじゃあ、フレちゃん。ジョーカーのことを教えてもらってもいいかな？ 私、あんまり詳しくないから」

「いいよ！ え〜っと……」

フレイズちゃんの話は少し支離滅裂になっている部分があつて分かりにくい部分もあつたけれど管理局で使われているジョーカーの定義と照らし合わせるとするならジョーカーと言つのは潜在能力の特に秀でた人に与えられるもの……

なのはちゃんのE級とは違うけれど頼りになる味方、というのは確かなことや。

「えっと、実はこの二人の他にもう一人急遽手伝つてくれる人がいるんやけど……顔合わせはまた今度でええかな？」

「私はいいですよ」

「私もいいよ〜！」

二人の快い承諾に私は一度手を叩いて話を打ち切った。

「それじゃ、親睦を深めるためにも一緒にご飯でも食べに行こか」

私達はリインをいれた四人で食堂に向かうことになった。

『今日の事件がもし早く解決したらゆりかご事件の資料整理を少し手伝ってくれたりせえへんかなあ……』

そんなくだらないことを考えながら私たちは何気ない会話に花を咲かせた。

第三話「集結」（後書き）

作者「バイトで忙しいよお……今頃はきつと」

クラウド「どうでもいいな」

作者「と言うわけでなんだかんだいって執筆速度が確実に落ちていくから謝罪の意味も含めて後書きにコーナーを設けようと思うんだけど……」

クラウド『どうしてそれを俺に聞くんだった……』

作者「反論はなさそうだね、と言うわけで記念すべき第一弾！ 後書きコミックをやっていくよー！」

クラウド「……好きにしてくれ」

作者「好きにするとも！ ちなみに後書きコミックって言うのは基本的に今回のお話の中で作者がキャラ崩壊とかそのあたり全く気にしないでネタにするのさ！ もしも他にも書いてくださる方がいらっしやったらゆくゆくはアンソロジー化も……」

クラウド「早く済ませる」

作者「一言バツサリ！？ し、仕方ない……とりあえずやっていこう」

【自己紹介】

はやて「私は機動六課の部隊長、八神はやてや」

レイチエル「陸士特別部隊のレイチエル・ルクスイリンです」

フレイズ「陸士108部隊から来ましたフレイズ・アインシュです
！好きな食べ物は甘い物全般で趣味は魔法の訓練を見ることがです
！好きな動物は可愛い動物です！」

レイチエル「そうなんですか」

フレイズ「うん！」

はやて「なんか部隊とかの自己紹介とはちょっと違うけど可愛いからええか〜……………」

作者「と言っわけで今回はここまで！ 皆さんもふと思いついたネタがあれば是非メッセなどで送ってください！」

クラウド「迷惑だな……………」

第四話「喰人」(前書き)

久方ぶりのCordis更新!

Nightmareもそうだけどこっちも早く書きたいところまで書けるようになりたい……

あ、それからラストの方は若干グロ表現がある……かも。

文才がないからそこまでグロく感じないかもしれないけれどリアルに想像するのは非推奨です!

第四話「喰人」

「あ、なのはちゃんにクラウド君！ ちょうどええところに」
「あれ？ はやてちゃん？ ……えっと、そっちの人たちは？」

食堂で一緒に食べていた私達……と言ってもクラウド君の前には水しかない状態でいかにも一緒に食べるのを避けているような雰囲気だけど……そんなに嫌われているのかなあ……
私がそんなことを思っているとはやてちゃんの後ろに立っていた二人が前に出てきてくれた。

「私は陸士108部隊から来たフレイズ・アインシュです！ 好きな食べ物甘い物全般で魔法訓練の様子を見ているのが好きです！
えっとそれからそれから……」

「フレちゃん、私が自己紹介してもいいかな？」

「あう！ ごめんなさい……」

「大丈夫だよ……陸士特別部隊のレイチエル・ルクスイリンです。
こちらにきたのは今日の事件の捜査の手伝いの為です」

二人の紹介を聞いて思わず笑みをこぼしながらクラウド君の苦手そうな二人だな……なんてことを考えていた。

「……」

クラウド君は予想通り何も言わずに………だけど意外なことに嫌悪と
言うより何かを探っているような目で二人を見ていた。

「クラウド君？」

「……いや、気のせいだな」

私の言葉が耳に入っていないかのように呟くとクラウド君はそのまま席を立った。

「あれ？ もうええんか？」

「俺がいたら四人で座れないだろ……俺はこんなうるさいところにいたくはない」

少しでも早く立ち去ろうという雰囲気さえ感じさせるその言葉に私たちは何も言えなくなり、クラウド君は私達に背を向けた。

私はなんとか話をしなくちゃと頭を急いで回転させて乱暴に席を立ちながら大きな声を出した。

「ま、待っててね！ この後、訓練場に行くから！！」

「……」

私の言葉にクラウド君は振り返りはしなかったものの気怠そうに片手だけあげてくれたところを見るととりあえず訓練場には来てくれるようだ。

その反応を見て安心した私はほっと一息つきながらゆっくりと椅子に座りなおした。

「なのはちゃん？」

「は、はやてちゃん？」

はやてちゃんのやけににやけたような顔に私はそこはかたなく嫌な予感を覚えて目を逸らそうとするけれどその前にははやてちゃんは私の顔を両手でしっかりと固定してしまった。

「やけにラブラブなようやったなあ？ さっきのなんてなんか彼氏

と待ち合わせしているみたいやっただで〜?」

「そ、そんなことないよ!? ね!? レイチェルさんもフレイズちゃんもそう思うよね!?!」

「う〜ん、ノーコメントでお願いします」

「え〜? ラブラブだったよ〜?」

「あうう………」

そんなに恥ずかしいことしたのかなあ……なんてことを思いながら私は何も言えずにレイチェルさんに止められるまではやてちゃんとフレイズちゃんに弄られ続けた。

「わーーーーーー!!!!!! ティアーーーーー!!!!!! 急がな

いとーーーーー!!!!!!」

「ったく! あんたが満足するまで昼食に付き合っているとロクなことにならないわね!?!」

スバルと一緒にたまには……と言うことで部屋で昼食をとっていたら気付いたころには訓練の時間を一時間も過ぎていた。

今までは食堂で食べていたこともあって周りの動きでなんとなく気が付いたりしたけれど今回は二人だけで部屋で食べていたのが裏目に出たようだった。

「ティアだっていっぱい食べてたじゃん! 私だけのせいじゃないよ……」

「うっさい馬鹿スバル！ 結局はあんたを待っていたのが原因でしょ！？」

二人で言い争いしながらも足を止めることなく訓練場に向かった私たちを待っていたのは予想外の人物だった。

「……………」

「あ、あれ？ クラウドさん？」
「そう、ね」

訓練場の端の方、ただ一人そこで立っていたのは犬や鳥、蛇や馬と言った多種多様な動物に囲まれていたクラウドさんだった。

その雰囲気は私たちに対して見せていた拒絶している雰囲気とは違ってまるで家族や親友といるかのような表情に私たちは一瞬誰だか分からないほどだった。

私達がしばらく呆けていると動物たちは突然蜘蛛の子を散らすように走り去って姿を消した。

「……………どうしたんだ？」

「あ、え、えつと……………」

さっきまでの様子とは打って変わって淡々とした言葉にスバルは何も言えなくなるけれどむしろそのおかげで私は冷静になって言わなければならぬことを口にすることができた。

「あの！ 訓練に遅れて申し訳ありませんでした！」

「あつ！ ご、ごめんなさい！！！」

私の言葉にスバルも慌てて一緒に頭を下げるがクラウドさんの様子は変わらずにただ私たちを見ているだけだった。

「お騒がせしてすみませんでした」
「そうだな」

クラウドの言葉にティアナは一瞬ムツとするが騒いでいたのは事実なのでそれ以上は何も言わずに特に話すこともなくなり立ち尽くすだけだった。

「クラウドさんの周りにいた動物たちって何だったんですか？ この辺りではそんなに動物がいた気はしないんですけど……」
「さあな」

スバルは場の雰囲気と和ませようとさりげなくクラウドに話を振ってみるがクラウドは関わるなどでも言いたげに短く答えるだけだった。

「……えっと、動物って好きなんですか？」
「別に」
「うう……」

あんまりと言えばあんまりな反応にスバルはどうしていいか分からずに涙目になってしまいがクラウドはそれを気にするでもなくただ沈黙を守り続けた。

「ティアナ……」
「ああ！ もう！ 何とかできるわけじゃないのに余計なことしないの！！」
「だって……」

すでに興味はなくなっただのかクラウドはティアナとスバルに視線を向けることなくただ訓練場の片隅に立ち続けるだけだった。

「それじゃあ、ティアナとスバルは今回はクラウド君に教えてもらってもいいかな？」

「……」

「あ、あれ？ どうしたの？」

クラウドはいつも通り何も言わずにいたがティアナとスバルも話さないということがあまりにも予想外だったなのはは思わず聞き返してしまった。

「い、いえ！ なんでもありません！！」

「さっさと始めるぞ」

いつの間にかティアナとスバルからすでに距離を取って立っていたクラウドは興味なさげにそう話しかける。

「それじゃ、クラウド君。二人をお願いね？」

「……」

クラウドは何も答えなかったもののなのははそれで満足したのかキヤロとエリオの所へと向かって行った。

「クラウドさん、よろしくお願いします」

「……これも仕事か」

「ふえ
」

突然聞こえてきた声の方を振り向く間もなくスバルは人間とは思えないような巨大な腕に逆さ吊りにされた。
その腕の持ち主は口元を歪ませる。

「これが死合だったら殺されていたぞ？」

ぞつとするほど感情の押し殺された声にスバルは一瞬背筋が凍ったがすぐに解放されようかとがむしやらに暴れだす。

「このっ!!」

「無駄……ってことが分からないのか？」

呆れているのか、馬鹿馬鹿しいと思っっているのか……クラウドは自分の腕の中で暴れるスバルに対して大きなため息をついた。

普通の人ならば諦めてしまうほどの力、スバルを圧殺するとまではいかないものの不釣り合いなまでに巨大化した片腕でスバルをしつかりと拘束できるほどの力を前にすれば常人ならばすぐに諦めたことだろう。

あくまで普通の相手ならば

「スバル！ 動くんじゃないわよ!!」

「っ!？」

ティアナの正確な魔力弾がスバルを拘束していた腕の先に何十発と撃ち抜く。

「っ、はあ!!」

僅かに緩んだその力を見逃すことなくスバルは一人で抜け出そうとした時以上の力でクラウドの腕から抜け出す。

だが、そんなことはクラウドにとってどうでもいいことだったのかこれといった反応もなくただただ撃ち抜いたティアナの方を眺める。

「大したもんだ、仲間を誤射する可能性がある状況で何十発も撃ち抜こうだなんて考え……そうそうできる奴はいない」

「別に、こんなこともできないんじゃないの？ さんに教わった意味ないわよ」

過信ではなく本心からの言葉にクラウドは僅かに驚いた表情を見せるがそれはあまりにも微々たるものでティアナが気が付くことはなかった。

「スバル！ 次の作戦で行くわ。へまするんじゃないわよ？」

「おう！」

当たり前のように協力し、当たり前のように支える……それはクラウドと真逆の戦い方だった。

「沈め」

自らの有する巨大な腕をスバルに振るうが直撃したスバルはまるで霧のように消えてなくなつた。

「デイバイン」

僅かに目の前で起きたことに驚きを隠せなかったクラウドは背後からの強襲の対処に遅れる。

つ存在はそんなこと気にも留めていないのかのように不敵に笑い
短く告げる。

「喰らえ」

命じているかのような、行為を語っているような……不気味な雰囲気
を漂わせたその言葉に応じるかのように彼の腕は巨大な顎あごへと姿
を変え

「それじゃあ、午後の模擬戦はここで終了!」

「……」

なのは声が響くとクラウドはゆっくりと顎をいつもの彼の腕に戻
した。

「あ、あの……クラウドさん……」

「模擬戦は終了だ、後はなのはの指示にでも従え」

「「あ、ありがとうございます!」」

その言葉を聞いていたのか聞いていないのかクラウドは興味なさげ
にそのまま二人に背を向けて立ち去った。

「早く早く! 折角の訓練が見れなくなっちゃっうよ!」

「そんなに慌てんでもええんとちゃっう?」

「駄目です！ 一秒でもたくさんみんなの訓練している姿を見たいんですから！！」

フレちゃんはまるで欲しかったおもちゃを買ってもらう子供の様な年相応な笑顔を私たちに見せてくれた。

「あれ？ クラウドさん？」

「ん……？」

私達は訓練場の方から戻ってくる途中のクラウドさんに遭遇した。

「クラウドさん、訓練はどうなったんですか？」

なんとなく暗い感じを覚えた私はできるだけ明るい声で話しかけた。一緒に働く人だからっていうこともあるけれどクラウドさんはなんだか放っておけない感じがする……と言うこともあって私は歩み寄った。

「ついさっき、終わったところだ」

「ええ！？ 終わっちゃったの！？」

この世の終わりと言っても過言ではないような表情をしたフレちゃんは手が地面についてしまうほど落ち込んでいた。

そんな姿を見て痛ましいと……どちらかと言うと鬱陶しそうな顔をしたクラウドさんはため息をつきながら口を開いた。

「俺の担当の模擬戦が終わっただけだ。戦闘訓練なんて俺にできるようなものじゃない」

「本当！？」

「鬱陶しいからその顔をやめろ」

フレちゃんの希望を見出したかのような顔にクラウドさんは短く一蹴するとそのまま私達から立ち去ろうとした。

「クラウド君はどこに行くんや？」

「……言う必要なんてない」

「駄目や、私は一応この部隊長や。勝手にどっかに行かへんようにちゃんと報告すること」

本当ならばそんなこと必要ないけれど八神部隊長はよっぽどクラウドさんのことを気にしているのか細かい事まで報告させようとしていた。

そんな八神部隊長の考えにクラウドさんも少なからず理解できたのか頭に手を当てながら答えた。

「人の少ない機動六課の裏の方にも行かせてもらう」

「了解や、でもここにいるのは仕事仲間なんやからもう少しかかわりを持った方がええで？」

「興味ないな」

一蹴。

まさに聞く耳持たないといった感じのクラウドさんは今度こそ文句ないだろう？ 暗に行動に示しているかのようにそのまま立ち去っていった。

「よし！ 早く訓練場に行こうよ！」

「せやな……無理強いらしたところでクラウド君、すぐに私らと打ち解けてくれる感じじゃあらへんもんな」

「……そうですね」

私達はとりあえず行動方針を決めると訓練場の方へと向かって行った。

人気のない機動六課の裏……目的地であるそこにたどり着いたクラウドは手近なところに座り込む。

『やっぱり一人でいる方が落ち着くな……』

そんなことを考えながら思い起こしていたのは病的なまでに関わってくる機動六課のメンバーを思い起こすが、すぐに頭を振って記憶から追い出す。

『仲間なんて……必要ない』

それは彼の信念と言うより本能と言っても過言ではないほどの彼の心。

だからこそ病的なまでに関わってくると思ってしまうほど彼の心もまた病的なものに歪んでいた。

「あ、クラウド君。こんなところにいた」

「……何の用だ？」

不機嫌そうなクラウドの言葉に声をかけたなのは頬を掻きながら苦笑いをする。

「模擬戦の後だからね、そんなにハードにできないからヴィータちゃんたちに任せちゃった」

なのははそれだけ告げるとゆっくりとクラウドに近づき、クラウドのすぐ横に座り込んだ。

「……………」

その行為にクラウドは僅かに眉を顰め、なのははから距離を置くこととするがすぐになのはは近くに座り込んできた。

「……………何の用だ？」

「クラウド君が私たちと関わりたくないって思っているのは分かっているけど……………やっぱり何も知らないでいるのは嫌だから」

だから　おはなししよ？　と続けたなのははにクラウドは興味なさげに顔を逸らす。

「分かっているなら放っておけばいいだろう」
「嫌」

短く……………けれどももしっかりとした意志を持った言葉にクラウドの言葉は一蹴される。

「私はクラウド君のことをよく知りたい、仲間だからこそもっと分かり合いたい」

「……………」

「駄目……………かな？」

本当に嫌なら無理強いはしない……そう言っているかのような最後の言葉にクラウドはしばらく沈黙を保っていた。数秒か……数分か、そのくらいの時間が流れたところでクラウドの近くに一羽の鳥がやってきた。

青い翼をもったその鳥はクラウドとなのはの間に流れる雰囲気をも感じないかのようにクラウドの手の上に吸い寄せられるように羽を休めた。

「なのはは……この鳥のことをどう思う？」

「え？」

突然の問いかけになのはは一瞬戸惑ったが質問の内容を理解するとクラウドの手に止まった青い鳥をじっくりと観察し始めた。

決して大きくない小鳥、そしてその体には汚れ一つなく、まるで空を思わせるような綺麗な青だった。

「綺麗だと思うよ」

少し考えてからなのはの導き出した答え。

「そうか」

クラウドはなのはの答えに僅かな笑みを漏らし

「俺にはただの獲物にしか見えない」

躊躇うことなく手に止まっていた青い小鳥を喰らった。

「え　？」

ガリ、ゴリ、バリ
骨を砕く音が辺りに響く。

ビチャ、グチャ、又チャ
血肉を喰らう音が耳に残る。

ギ、キーー
生き物だったものが最期の鳴き声を上げる。

「あ……え……？」

あまりにも歪なその光景になのはは状況を理解することができなかつた。

クラウドの手に止まっていた生き物は今となっては生きていたモノとなってしまうた。

「これが 俺だ」

「え？」

いつの間にか全てを喰らい尽くしたクラウドの言葉になのはは現実へと引き戻される。

「生物を喰らい、それを糧にする……どこまでも生物らしくて……
人間離れした存在」

それだけ告げるとクラウドは背中から空を思わせるような青い翼を
広げた。

「これで分かっただろう？ 俺の能力は 喰らった生き物の性
質を模倣することだ」

第四話「喰人」（後書き）

作者「と言うわけでクラウドの能力の公開シーンでした!」

クラウド「……………」

作者「ていうかグロくない!? 生き物をそのまま食べてるんだよ!?」

クラウド「どんな生き物だって何かを食べているだろう? 俺もそれに従っているだけだ」

作者「そうだけど……………人間離れしているなあ……………」

クラウド「そんなこと、俺が一番よく知っている」

作者「それで? なんかなのはにもものすごくグロいところを見せたけどどうするのさ?」

クラウド「ああでもしないと一生関わってくるからな」

作者「……………なかなかえぐいよね……………」

クラウド「……………」

作者「そんなことされるとますます主人公らしくなくなるよ?」

クラウド「別に……………望んでなんかいない」

作者「あつそ……」

第五話「仲間」(前書き)

久しぶり過ぎて自分で何回か見直してから執筆したのは秘密。
とは言えなんとなく書きたいことは決まっていたので矛盾がない程
度に書いていけたらいいな

第五話「仲間」

「今日もお父さん……お仕事なの？」

いてほしい存在がないことに自分の中でぼつかりと穴が開いたような感覚を抱いているとお母さんは興味なさげに答えた。

「あの人は私たち家族より自分の研究の方が好きなのよ……あなたもあの人のことを父親だと思うのはやめなさい」

「……はい」

本当はそんなこと思いたくなかったけれど、お母さんに嫌な気持ちになってほしくなくて言われたことを頷く。

お父さんも、お母さんも大好きなのに仲良くできないという現状を改善するということは子供にはあまりにも荷が重すぎた。

「……私たちの事より自分のことを考えなさい。友達……作りたいんでしょ？」

ドン臭くて、抜けていて、頭もよくなって、暗い性格で……そんな自分に友達がいるわけなんてなかった。

それでも、たった一人でもいい。

自分のことを分かってくれる……そんな友達がいてくれればお父さんやお母さんに負担をかけずに済むんじゃないか？ それだけのことができれば二人は昔みたいに仲良くなってくれるんじゃないか？ そんなことを思いながら残った朝食を飲み込んでから食器を片づける。

「……行ってくるね」

「気を付けてね」

それだけの会話……それでも安心できるけれどわがママを言っていないなら奥の部屋にこもっているもう一人の大好きな人にも言っていないかった。

そんな視線に気が付いたのかお母さんが少し眉を顰めたのでこれ以上、苛立たせないように急いで家から出発した。

「……友達、できるといいな」

もう何百回も繰り返した言葉……だけどそれは本当に叶ってほしい願いで　　僅かな希望に縋りつくような気持ちでちょっとだけ足を速めていた。

【これが　俺だ】

嫌でも思い出してしまうのはクラウド君の昨日の姿　　。
あまりにも現実離れしていて、あまりにも受け入れがたい出来事……

「だけど……一人になんてしておけないよ」

ベッドから体を出して着替えはじめる。

時間はまだ早朝訓練をするまでに十分すぎるほどにある。

「一人ぼっちって、すごく寂しいもん……だから」

訓練のための準備を終え、私はまだ眠っているフェイトちゃんとヴィオの方へと振り返ってから部屋を出た。

ジュエルシードの事件の後、フェイトちゃんとちゃんと友達になれた。

スカリエッティの事件もあっただけどヴィオとまた親子として暮らすことができた。

だから絶対、クラウド君も一人になんてさせない……今拒絶しているのは何か理由があると思うから。

早朝訓練が始まるにはまだ早すぎる時間……そんな時間に歩いてい
る人がいるわけもなく、私は特に誰とすれ違うこともなく廊下を歩
いていた。

「おはなししないと……」

そんな咳きは廊下に反響することもなく、朝の空気に溶けるように
消え、私は一度大きく深呼吸をしてからクラウド君のいる部屋にノ
ックをしようとした。

「あれ？　なのはさん？」

「レイチエルさん？　早いなだね」

ノックをする前に声をかけてきたのは昨日付けで機動六課に異動し
てきたレイチエルさんだった。

目の前の状況から私のしようと思っていたことを察したのかレイチ
エルさんはふつと優しい笑みを浮かべると口を開いた。

「クラウドさんなら外に行くのを見ましたよ？　どこに行くかまで
は聞けなかったけれどたぶん散歩じゃないかな？」

「そうなんだ……ありがとう、レイチエルさん！」

お礼の言葉を言ってから私はクラウド君と入れ違いにならないように急いで外へと向かって行った。

外に出てから辺りを見回した私は目立たない場所に何匹かの動物に囲まれている人の姿を見つけた。

目を覚ましてから騒がしくなる前に……と、外に出た俺はいつものように自分の中に取り込んだ何匹かの動物を体の外に出した。人付き合いは面倒だと思っし、信用できないとは思っが、こいつらは俺自身のようなものだし、何よりこいつらの力に頼っているからこそ、こうしてたまに俺に喰われる前のように普通の姿で外で自由にしている。

「……別に外にいる間くらい、俺から離れてもいいんだぞ？」

「ちちちち」

「そうか……」

そんな言葉に応じたのは昨日喰らったばかりの青い鳥……他の生き物もそうだが、一度取り込んだおかげである程度の動物の言語は分かるようになってる。

それゆえに、こいつらを統括するのも俺の役目だし、ここにいるやつらも喰われる前は生きる為に抵抗もしたが、取り込まれてからは俺に頼った方が生きられると学習したのか力を貸し、守ると言う関

係が成り立っている。

『……束縛しているみたいでこの能力は未だに好きになれないけどな』

朝の柔らかい日差しの中でぼんやりとそんなことを考えていると、動物たちが何かの気配を感じて慌てて俺の中に再び戻っていった。こいつらを守るといふ暗黙の了解を守るといふ意味も含めて俺は感覚を鋭敏にして気配のする方を向いた。

「あれ？ さっきの動物たちは？」

「なのはか……何の用だ？」

戦闘態勢に入ろうとしていた俺は相手を確認すると一気にやる気がそがれ、そのまま構えを崩して早々に用件を済ませようとした。

「ちょっとおはなししたいんだけど……」

「はなしならもう済んだだろ？ いちいち絡んでくるな　それとも仕事か何かなのか？」

「そうじゃないけど……」

「それならこの話は終わりだ」

それだけ答えてから俺は体を起こして、なのはの脇を抜けて再び建物の中に戻ろうとするが俺の拒絶を無視するかのようになのはは俺の後についてきた。

『……なんなんだ？　仕事以外の話を聞くつもりなんてないって言っただけだぞ？』

そう思いはしたもののわざわざ言う気にはなれずにそのままお互い

が無言のままただ六課の中を歩き続ける。

この時間はまだ起きている方が珍しいのか、部屋へと向かうまであったのは一人二人程度で見知った顔に会うこともなかった。

……と言ってもそもそも覚えるつもりなんてないが。

「……いつまでついてくるつもりだ？」

部屋の前まで来てはなお、俺の後についてくるのはに頭を押さえなくなるが、用件を早く済ませる為に諦めて淡々と聞くことにした。

「だから、おはなししよう？ 仲間同士ちゃんとお互いのことを理解しないと」

「それは仕事なのか？」

「仕事とか仕事じゃないとかじゃないよ、仲間として必要なこと！」

『どうして無理やり仲間にしたがるんだ……？』

そんなことを考えているのが表情から見て取れたのかなのははムツとした表情を見ると、そのまま言葉を続けた。

「そんなに仲間として嫌なら友達として！ それならいいよね！？」

「……友達？」

「え？」

俺の予想外の反応に驚いたのかなのはは呆然としていたが、そんなことを気にする余裕なんて俺にはなかった。

自分自身、どうしてなのはの言葉を復唱したのかが分からなかった。

「……そんなものに興味はない」

「えっ？ あ、クラウド君!？」

「早朝訓練の支度をしてくる……もういいだろ？」

その問いかけになのは何も言わずに俺はただ足音が遠ざかっていくのを聞いてから大きく息を吐いた。

自分が訳の分からないもやもやしたものを抱えていることを自覚して吐き気がする……目の前が歪んだような錯覚さえ感じられる。

「ぐるぐる……」

「ああ……大丈夫だ、心配かけさせたな」

声をかけられたおかげか何とか意識をしっかりと保てた。

思い出せばいけないこと……思い出したら何かが壊れそうになること……

「思い出す必要なんて どこにもない」

嫌な汗を大量にかいたことに気が付いた俺は呼吸が落ち着いたところでいつのまにか座り込んでいた体を起こし、シャワーを浴びる準備から始めた。

『しばらくなのはと距離を置く必要があるかもしれないな……』

自分ですらどうすればいいのか分からないような得体のしれない感触に戸惑っている以上、安易に俺に関わってくるのには対しては今まで以上に距離を置いた方がいいのかもしれない。

そんなことを考えながら俺は頭から一気に冷水を浴びて崩れかけていた意識をはっきりとさせた。

「……ちつ、まだ体が痛みやがる」

思い出すのは血まみれになりながらもム力つくぐらいに澄ました顔をしていた成功例……あれだけの力があればこの程度の傷ならすぐに治るってことが理解できるからこそ余計に腹立たしい。

「そこら辺にいる奴らでも喰らうか？」

勝手にそんなことをすればあいつが文句言うことは分かりきっているがその位しないと割に合わない。

『手負いのようだな』

「あんたか……ご覧のとおり、今の俺は何の役にも立たないぜえ？
そこら辺にいる奴らを喰らってもいいなら別かもしれねえけどなあ！―！」

『許可する』

「あん？」

予想もしなかった言葉に一瞬虚を突かれるが、その意味を理解した俺はすぐに口元をゆるめて立ち上がりながら答える。

「随分と気前がいいじゃねえか？ いいことでもあったのかよお？」

『……お前には関係ない』

「はっ！ ちげえねえな」

念話の相手の姿を一度も見たことなんてねえし、念話も男か女かも

分からないように声を変えるような信用の置けねえやつではあるが少なくともこの化け物じみた能力をよこしたのはこいつだった。

「いいぜえ……あんたの許可が下りた以上、好きに食い荒らさせてもらっ」

『ただし条件がある』

「ちっ、先言えよ。白ける……」

ようやく好きなように好きな奴を喰らうことができると思っていたのに一気に白けた気分になる。

『喰らっていい範囲は成功例の近く……機動六課周辺に限る』

「くっは……わっけ分かんねえなあ？ ムカつきすぎて今の俺だとあいつを喰らうかもしれねえぞ？」

何の目的があるのかは分からねえけど、どうにもこいつは俺と同じ……いや、ムカつくけど成功例の方がオリジナルなんだろう。そいつに用があるらしいが、今の俺は体の一部を殺されて平常じゃいられない状態だった。

『喰らうのは構わない、殺さなければ』

「ますます意味が分からねえけど……その心配はねえよ」

自分の体を覆い隠していた薄汚い布を一気に取り払って常人から見れば歪な体が姿を現す。

成功例に体の一部を殺され、壊され……代替品として他の生き物を喰らって強引につなぎ合わせた真正正銘の化け物。

「俺にとってあの成功例は最高の獲物以外の何ものでもねえ……あいつを喰らえば俺が成功例になれるんだからなあ！」

どんな思惑があるのかなんて分からねえし、知りたいとも思わねえ……重要なのはまたあいつを喰らうチャンスがあるってこと……それだけのことに俺の感情はどうしようもないくらいに昂りつづけた。

「お望みどおり喰らい尽くしてやるよ　　こんなふざけた世界をぶち壊すためにもなあ!!」

なのはと一緒に早朝訓練の準備をしていると突然はやてから念話が届いた。

『フェイトちゃん、なのはちゃん！　訓練中にごめんな!!』
『どうしたのはやてちゃん?』

妙に慌てた様子のはやてになのはが首を傾げながら問い返すけれど答えたのははやてじゃなくてレイチエルだった。

『私とフレちゃんが機動六課に配属された理由……この辺りで起きていた動物たちの変死体の原因究明だったんですけれど　　ついさつき、一般人が犠牲になったという報告がありました』

あまりにも生々しい話に私たちは二の句が継げなくなるけれど、仕事である以上黙りつづけているわけにもいかない。

『……報告が私たちにも来たってことはそつちの調査に参加ってことだね？ 変死体って言うのは具体的には？』

『何者かによつて食い散らかされたような跡です……原形はとどめられているですけど、心臓のある胸のあたりを中心にござりとなくなつたままの死体がこの辺りを中心に発生していたのですが……ついに一般人を巻き込むように』

『食い散らかされた……？』

なのは何か気になるところがあつたのかレイチエルの言葉を復唱して……しばらく何かを考え込んでいるとすぐに決心したのか俯いていた顔を上げて口を開いた。

『この調査、クラウド君にも参加してもらつていいかな？』

『さすがにただのお手伝いさんにそこまで協力してもらつのはなあ

……何か理由があるん？』

『うん……だけど、理由はちよつとまだ言えないんだ』

強引にクラウドを参加させようとするのは違和感を覚えた私が思わずはやての方を見ると、はやても同じようなことを思ったのか少し考えてから頷いた。

『せやけど危険なことに変わりあらへん。クラウド君に関してはなのはちゃんに一任するで？』

『大丈夫だよ』

『これでクラウドさんと仲良しになれますね！』

フレイズちゃんの元気な声になんだか場が和んだような感じを覚えつつも、これは仕事だと自分にしっかりと言い聞かせて、クラウドを呼びに行ったのはと一度別れて私ははやて達のいる部隊長室で

詳しい話を聞きに向かった。

『なんで俺がこんなことに巻き込まれる……』

「クラウド君、これは仕事だからね？」

「分かっている」

しばらくは会いたくないと思っていた相手と無理やり組まされたことに関して文句の一つも言いたくなるが、そんなことをなのは達に言ったところで無駄だというのはなんとなく理解していた。

『だからって納得できるわけじゃないけどな……』

なのは達隊長を含め、外部から来たという二人の魔導師が集まって話したのは動物たちの謎の変死体についてだったが、恐らくその食い散らかしたような変死体も、今朝襲われたという一般人に関することも俺と同じような能力で誰かを喰らった奴が原因なんだろう。大方、生き物を喰らって能力を模倣する俺と被っていたから監視付きで調査なんだろう……

『……なのはに話したのは失敗だったな』

突き放すために話したことだったが、どうやらそれが裏目に出たようだった。

「ねえ、クラウド君……おはなしの続きをしてもいいかな？」

「仕事じゃなかったのか？」

「仕事をしながら」

『どうせ断らせる気なんてないんだろう……？ だから嫌なんだ……』

抵抗することを諦めた俺はそのままなのはを無視して、事件のあった場所の周辺を歩き回り続けた。

「クラウド君、私に自分の能力のことを話してくれたよね？」

「ああ、そのせいでこんなことに付き合わされて正直後悔しているけどな」

別にそれが原因で疑われるのなんて構わない……別に仲間とも思っていないような奴が俺に対してどう思おうが自由だが、いちいち俺に干渉しないでほしい。

そんなこと俺は望んでもいないし、頼んでもいない……俺はただ一人で誰とも一緒にいたくない。

「そう言うこと言わないでよ……私は嬉しかったよ？ 少しは心を許してくれたのかな？ って思えたから」

『勝手に思っている……俺は突き放すためにやっただけなんだからな……』

そんなことを考えていると俺の中にいる獣がこちらに向けられている殺気に気が付いた。

「マスター」

「うん……少し強い魔力反応を感じるね」

デバイスの報告もあつてかなのはも僅かに遅れてその存在に気が付くがまだ姿までは捉えきれしていないようだった。

確かに普通の相手に関してならかなり巧妙に隠れているんだろうが情報を視覚以外からも取り入れられる俺からすれば隠れる気があるのかと疑いたくもなる。

そこから放たれた魔力弾を俺は避け、後ろにいたなのはもギリギリのタイミングではあるが防御魔法を張って何とかダメージを軽減した。

「えっ？ 今、どこから……」「耳を塞げ！」「っ！？」

第二波が放たれる前に俺はなのはにそれだけ告げると、俺の言葉にしたがつたかどうかを確認する前に擬態している目の前の敵に対して高周波の音を放つ。

その高周波に近くにあつた窓ガラスは割れ、降り注ぐ形になったが近くに通行人はおらず、俺達の位置にも降り注がない位置なので問題は無い。

「っ！？ ぐっ……ああああ！！！」

苦手な音の周波を当てられ、錯視的に姿を隠していた男の姿が現れる。

「っ……あの入って」

耳を塞いでもまだ僅かに違和感があつたのかなのはは辛そうな表情をしながら姿を現した男の方を見た。

「擬態……主に視覚に頼る天敵から身を守るために編み出した生物の能力だ。もっとも、こいつを主食とするやつは高周波の音を出し

て無力化してからのようだけどな」

「さすがは成功例……随分と多種多様な能力をお持ちじゃねえか……」

予想以上に早くダメージの抜けた男は体を起こしながら獰猛な笑みを浮かべた。

『……こいつ、姿や体格は変わっているが前に俺を襲ってきたやつか』

一般人を喰らったのは恐らくこいつだろう……俺の能力の事に知って、固執することから考えてもそれが自然だし、なにより『コア』が一致することにも納得がいく。

「機動六課の高町なのは一等空尉です。一般人を襲ったのはあなたですか？」

あくまで規則に則って目の前の男を捕まえようとするのはに對して男は笑いながら俺の方を眺める。

「おい……こんなつまんねえ女に従順にしたがうちまうような奴なのかよ？ あんたはよお！！」

「……どうにも仕事らしいんでな。悪いが相手になってもらうぞ」「くだらねえ……」

男は吐き捨てるように呟き、そのまま本能のままに怒鳴りはじめる。

「くだらねえ、くだらねえ！ くだらねえ！！ あんたみたいな成功例がそんなくだらねえものに縛られてんじゃねえよ！ 化け物なら化け物らしく本能のままに戦うのが当然の摂理だろうがあああ！

「!!」

自分が化け物だなんて分かりきっている。

生き物としてあるべき姿でありながら、人としてあるべき姿ではない存在……

それでも……俺はこんな力に吞まれるつもりはない。

「人の姿である以上、あんたほどの化け物になるつもりはないな」
「私も戦うからね、クラウド君」

なんとか耳に対するダメージが抜けたのか、なのはは自分のデバイスを構えて俺の隣に立つ。

「……好きにしろ」

拒否したところで無駄なことは分かっている。

それなら好きにやらせておけば勝手に満足するだろう。

「うぜえ……二人まとめて喰らってやるよ。成功例もその魔導師も十分な能力を持っているみたいだからなあ!!」

第五話「仲間」（後書き）

前回忘れていたみたいだけど、後書きコミックをやるう。

まあ、また忘れる可能性もあるので不定期更新&小説の雰囲気著しく壊す可能性があるので嫌な方は戻るキーをお願いいたします。

【仲間】

なのは「だから、おはなししよう？ 仲間同士ちゃんとお互いのことを理解しないと」

クラウド「それは仕事なのか？」

なのは「仕事とか仕事じゃないとかじゃないよ、仲間として必要な

ことー!」

クラウド『どうして無理やり仲間にしたがるんだ……?』

なのは「そんなに仲間としてが嫌なら　　「クラウド」え?」

クラウド「俺の名前はクラウド・アフェクトウス。身長は183、体重は68、一日に取るカロリーは約8500Cal、食べ物に関しては特に好き嫌いはなく一人でいる時間や、動物と過ごしている時間が好きだ。戦闘スタイルは喰らった生き物の能力を模倣して圧倒させるフロントアタッカー的位置づけだ」

クラウド「次はなのはの番だぞ?」

なのは「ええっ!?　そこまで詳しく話すの!?　さすがに体重とかは嫌なんだけど!」

【条件】

男「いいぜえ……あんたの許可が下りた以上、好きに食い荒らさせてもらおう」

????「ただし条件がある」

男「ちつ、先言えよ。白ける……」

????「喰らつていい範囲は成功例の近く……機動六課周辺」

男「了解、それだけ守れば　　「なおかつ」あん?」

????「年収は三億以上、そして職業はモデルに限定し、学力に関しては偏差値70以上、かつ尽くしてくれる者だ」

????「分かったな?」

男「あんた本当は許可する気ねえだろ……」

【仕事】

男「おい……こんなつまんねえ女に従順にしたがっちまうような奴なのかよ？ あんたはよお……」

クラウド「……どうにも仕事らしいんでな。悪いが相手になってもらうぞ」

なのは「ちょ、ちょっと待ってよ!？」

男「あん？ なんだよ……」

なのは「なんかそれだけ聞いてると私が強引に押し付けているみたいなんだけど!？」

クラウド「……自覚なかったのか？」

……はい、なんか色々酷いっすね。

仕方ないんです、センスとかがないんで……その為に練習して感想貰ってやっていくつもりなんである程度我慢していただいて、よろしければこういう風にするといういい的な意見がありますと大変ありがたいです。

第六話「仇敵」(前書き)

今回短いかも……

でも流れるにも繋げるよりかは一度ここで切った方がいいんですよ
ね……

安定させたいなあ……

第六話「仇敵」

体の一部を獣へと変質させ、男は一気にクラウドとなのはとの距離を詰め、舗装された地面を抉りながら二人から少し離れた位置で蹴り上げる。

その謎の行動になのはは一瞬理解が追いつかなかったがすぐにその理由を知る。

「吹き飛ばす」

轟っ！ と音が響くと同時にクラウドとなのはにすさまじい風圧が襲い掛かる。

突然の状況になのはは慌ててプロテクションを展開しようとするが、クラウドはそれより早く甲羅のようなものを前に展開し、衝撃を後ろに逸らした。

「あ、ありがとう……クラウド君」

「化け物と戦うって決めた以上、常識にしばらくはられるな……化け物に常識は通用しない」

それだけ答えるとクラウドは一瞬でトップスピードになると蹴り上げたばかりで行動できない男に対して、躊躇うことなく丸太のような太さになった腕で殴りつけた。

傍から見ると、クラウドの人間離れた腕に驚きを隠せないだろうがクラウドの能力を知っていたなのはそれほど驚くことはなかったが、それ以上にやりすぎたのではないか？ という思いが強かった。

『いくらなんでも無防備な相手にあんな能力まで使わなくてよかつ

たと思うけどな……』

少しずつ弱まっていく魔力を感じながらも捕縛するまでは取り逃がさないようにしようと思構えるのはに対して、クラウドはピクリとも動かないような相手に対して未だに気を緩めることはなかった。異常すぎるほどの集中力……ゆえにクラウドはなのはが気が付くより前に背後からの気配に気が付いた。

「ぐるるるる……」

「ふん、不味そうな客だな」

「余裕なのね、成功例……」

そう言っただち上がったのは、さっきまでピクリとも動かなかった男……しかし、その風貌、言葉遣いは完全に別人だった。

「え……？ 女の人……」

「予備の体か……一体何人喰らった？」

「私の意志で統括できるくらい……って言えばいいかしら？ ああ、もちろん似合わないのは分かっているわよ？ それでもこの体の持ち主がこういう話し方だったのだから仕方ないでしょう？ ……まあ、成功例には分からない辛さかもしれないけどね」

姿が男から女に変わったことに驚きを隠せないのはと挑発するよ
うな物言いをする女に対して不快そうな表情をしたクラウドに女は
不敵に笑うだけだった。

「あんと一緒にするな、俺は人なんて喰らわない」

「何？ その馬鹿みたいな信念……化け物がそんなくだらしないものに縛られてどうするのよ？」

「くだらなくても構わない。俺は 自分から人をやめるつもり

はない」

面白いものを見るかのように女が笑うが、クラウドはそれ以上答えることなく、ただ相手を倒すことだけを考えながら体を沈ませ、戦闘に最適な準備を整える。

クラウドの中にいる獣たちもクラウドに呼応するように、自らの能力を出し惜しみすることなくその全てを託した。

「私に喰われるために制限してくれているのかしら？ それならありがたく……」

ただ女の方を向いて構えるクラウドに対して女は持ち上げた手をすつと降ろした。

「……があああああああ！！！！！！」

それと同時にクラウドの後ろに控えていた狼よりも一回りほど大きい黒い獣がクラウドに飛びかかるがそれは突如横から飛んできた桃色の魔力弾によって妨害される。

魔力弾を放った主は自らのデバイスを握りなおしながらクラウドと背中合わせになるように立ち、獣の方へと視線を向けながら後ろにいる仲間に話しかけた。

「クラウド君、こっちは私がやるから女の人の方をお願い」

「……ふん、どうせ断らせる気なんてないんだろう？」

「私がないほうがうまくいく理由があるなら構わないよ？」

なのはの言葉に顔を見なくても分かるほど露骨にため息をついたクラウドは諦観したような顔つきでその言葉に答えた。

「足を引つ張るなよ、なのは」
「仕事なんだからミスしないでね、クラウド君」

二人は最後にそれだけ言葉を交わすと目の前にいる自分の倒すべき相手に疾駆した。

『レイチエルさん！ そつちはどれくらいで合流できそうですか！
？』

『担当していた場所についたばかりですから一番遅くなると思います
す……なのはさんとクラウドさん、無事だといいいんですけど……』

私は強化魔法を使いながら二人のいるところに急いで向かった。
強化魔法の使用制限は特にはないけれどそれでも色々魔法を使うのに
許可を貰わないといけないのはすごく嫌だ。

けれど、もしも使用許可なしで勝手に使ったりしたらミゼットおば
あちゃんがお菓子禁止にするからそれだけは絶対にできない……お
じいちゃんたちにこっそりお菓子を貰ったらおばあちゃん、すごく
怖かったし……

『つと、そんなこと考えてる場合じゃないよね。早く着いて二人を
助けなくちゃ！』

私やレイチエルお姉ちゃんはこの事件を別々にだけれど調査してい
たから戦えるけれど何も知らない人が戦ったら絶対に大変なことに

なる。

あの化け物は生き物を喰らってその能力を得る……その化け物の獲物は人間でさえ例外ではない。

なのはさんのような膨大な魔力の持ち主……そして、なのはさんの訓練のサポートをできるほどの実力を持つクラウドさんは化け物にとっての格好の獲物だ。

喰らえばその能力を手に入れ、その分強くなる……理屈は分からないけれど生き物枠組みから超越したような存在、生き物の本来持つ進化と言つ過程を喰らって能力を得ることで弱肉強食の世界に適応しすぎた存在。

「もう……誰かが食べられるところなんて見たくないから！」

ほとんど無意識のうちに叫んでいた言葉。

ずっと前の悲しい出来事から目を逸らすように私はより速度を上げて、なのはさんとクラウドさんの所へと向かった。

何も考えたくなかった。

何も思い出したくなかった。

そのために私はずっと訓練を積んでジョーカーって呼ばれるようになつたんだから……

「あはっ。さっさと喰われちゃいなさいよ!!」

女はまるで踊るかのようにクラウドからの攻撃を避け、そのまま背後にいた獣に飛びかからせる。

「ちっ!」

襲い掛かってくる獣を迎撃する為にクラウドは体を反転させ、鰐のような顎を右腕に出現させ、噛み砕こうとするが……

「クラウド君!!」

クラウドの援護の為に襲い掛かってきた獣に対し、すでに砲撃魔法を放ってしまったのははクラウドの予想外の反転に驚きを隠せなかった。

ギリギリのタイミングでなのはの叫び声に気が付いたクラウドが砲撃魔法を避ける為に強引に体を捻らせるが、完全に避けけることはできずに掠るようなダメージを受けてしまった。

「っ、なのは! 後ろがお前の担当ならここまで接近を許すな!」

「クラウド君が私を信じてくれれば普通に撃ち落せたよ!」

場所が裏通りであるため動ける範囲が狭いこと、そしてお互いのコンビネーションを高める訓練を一度も行っていないこともあり、なのはもクラウドも自分の戦いたいように戦えずにいた。

「なあんだ、もう少し手こずるかと思っていただけで意外と大したことないじゃない」

挑発するような女の物言いにクラウドは思わず舌打ちをしながら再び距離を詰める。

それに対して女は面白いものを見るかのように笑みを絶やさずに呆然と立ち尽くしながらクラウドを待った。

「はっ！ 随分と余裕だな！！」

「そんなことないわ……」

クラウドは躊躇うことなく生き物を喰らったことによって得た鋭い爪で女を引き裂こうとするがその攻撃は見えない何かによって阻まれた。

「っ！？」

「むしる警戒しすぎているくらいよ」

呟くような声を女が出すと、クラウドの爪や腕を中心に絡みつく糸のようなものがキラリと光った。

その一見すると蜘蛛の糸のような強固な糸はしっかりとクラウドを絡め取り、動きを制限した。

「なす術なく喰われる気持ちってどんな気分かしら？」

ゆっくりと近づいてくる女に対して、クラウドは恐れることなく睨み返すが、それしかできないクラウドを見て女はより嬉しそうに笑った。

「それじゃあ……いただきます」

「クラウド君……」

クラウドに対して口を開いて少しづつ距離を縮めてくる女をなのは迎撃しようとするが、近くににいる獣たちがそれを妨害する。そんな状況の中、クラウドは気にした素振りも見せずに近づいてきた女の顔に目掛けて唾を吐いた。

「なっ!? あ、がああああ!!!」

その唾液が顔についたと同時に女の皮膚は焼け爛れ、その痛みにくラウドを束縛していた糸の檻を解いてしまった。

「たかが体を拘束した程度で油断しすぎなんだよ」

「く、はっ。毒液……本気で殺しに来ているってことはあなたにとって私は喰らう価値もないってことね」

「言っただろうが……俺は人を喰らわない」

つまらなそうに吐き捨てるクラウドに対して女は憎しみのこもった目で睨み付けた。

それが同族でありながら自分だけは違うかのように振る舞うクラウドに対する嫌悪感なのか、それとも簡単にあしらわれてしまう自分の不甲斐なさからなのかは誰にも分からない。

「クラウドさん！なのはさん！大丈夫ですか!？」

「ちっ、増援……どうやら引いた方がいいみたいね」

女は舌打ち交じりに手を動かして獣たちに指示を出すと、獣たちはなのはの周囲から逃げ出し女の元へと集まった。

「今日ここまで……だけど私はあなたを諦めたわけじゃないわ」
「待て！セクレト!!!」

女の名前を叫んだのはクラウドでもなのはでもなく飛び込むようにやってきたフレイズだった。普段の姿しか見たことのないのははフレイズの怒りをあらわにした叫びに驚いていたが、セクレトと呼ばれた女はつまらなそうに眺めて一言呟いた。

「誰……？ あなた」

「っ！？ あああああ！！！！！！」

その言葉にフレイズは泣いているのか怒っているのか分からないような顔で叫びながら一気に距離を詰め、手にしたデバイスで日本刀のような形を展開し躊躇うことなくデバイスを振るった。

しかし、それに対してセクレトはつまらなそうな顔を崩すことなく背中から生えた翼でフレイズの斬撃を防ぐ。

セクレトへのダメージは0……それでもフレイズは子供が駄々をこねるように斬撃を繰り返し続ける。

「返せ！ 返せ！！ 返せ！！！！ 返せえええええ！！！！！！」

「邪魔……よ！」

デバイスを引き戻す僅かな隙についてセクレトは腕を鎌状に変えようと振り上げる形でフレイズに斬りかかる。

突然の反撃に驚いたのかフレイズは体を強張らせたことで動けなくなり、その斬撃が無情にも少女を引き裂くかと思われた……

「足を引つ張るな！」

「っ！？」

クラウドの叫び声とともにフレイズは何かによって一気に上へと持ち上げられ、そのままセクレトの攻撃は空を斬った。

「……まあいいわ」

つまらなそうにクラウドを眺めたセクレトは獣を従え、そのまま壁を蹴りあげながら建物を駆けのぼり姿を消した。

その後をなのは追うべきかどうか一瞬だけ悩んだがすぐにクラウドやフレイズの確認をすべきだと判断し、二人の元へと駆け寄った。

「二人とも！ 大丈夫！？」

「ああ、足さえ引つ張られなければもつと楽だったけどな……」

「……」

皮肉を言うほど余裕のあるクラウドに対してフレイズは俯いたまま表情を見せずに黙っていた。

その様子を気にすることもなくクラウドはフレイズを上へと持ち上げることで救った触手を地面へとゆっくりと降ろし、フレイズを触手から外した。

「助けに来ておいて助けられるなんて無様だな」

「っ……！」

「クラウド君！ そんな言い方」

なのはの言葉を遮ったのは「バチン」と言う甲高い音……その音はフレイズの手から出ており、それを見ていたなのはでさえ状況を理解できなかった。

「て、めえ……」

頬を思い切りはたかれたクラウドは怒りを隠すことなくフレイズを睨み付けた。

「あなたに」

それに対してフレイズは俯いたまま肩を震わせ、叫んだ。

「あなたみたいな化け物に助けてほしいなんて頼んだ覚えはない！」

仇敵を前にしたかのようなフレイズの泣きながらの怒りになのははどすすればいいのかわからずに見ていることしかできなかつた。

第六話「仇敵」(後書き)

Nightmareが無事に完結したのでこれからはこちらに専念
できますね。

とは言え安心の(?) 不定期更新ですけど！

と言っわけで後書きコミック、いつものように色々残念ですので気
にしない方だけこのまま読み進めてください。

【あ……】

セクレト「 吹き飛ばす」

なのは『あんなに離れたところでどうして!?!』

クラウド「させるか! ぐっ!」

クラウド「化け物と戦って決めた以上常識に……」

なのは「私の前に立ったなら一緒に守ってよおおお!?!?!?!」

クラウド「あ……………」

「風圧までは防ぎきれなかったようです」

【撃ち落とせたよ！】

セクレト「あはっ。さっさと喰われちゃいなさいよ！！」

クラウド「ちっ！」『後ろから獣……………迎撃間に合うか！？』

なのは「クラウド君！」

じゅっ 獣を避けてクラウドに掠った魔力弾

クラウド「おわっ！？」

なのは「クラウド君が私を信じてくれれば普通に撃ち落せたよ……………ちっ」

クラウド「絶対に俺を打ち落とす気だったたる……………舌打ちしてんじやねえ」

【憎さ余って殺意百倍】

クラウド「助けに来て助けられるなんて無様だな」

フレイズ「……………！！」

なのは「クラウド君！ そんな言い方……………ザシユ……………え？」

フレイズ「あなたみたいな化け物に助けてほしいなんて頼んだ覚えはない！」

クラウド「……………」

なのは『フレイズちゃん……さすがに武器はまずいよ……』

……実はお前ら仲悪いだろ。

とか突っ込んだ人には腕立てを自分の小説の話数×5回やっていた
だきますwwww

第七話「母親」(前書き)

ようやく更新です。

久方ぶりの更新です。

しかし、課題は未だに果てを見せず……

私の先には更にテストと言う名の悪魔が……

ま、私の近況なんてどうでもいいですよね。

今回はクラウドよりもフレーズがメインです。

空いた時間にちよろちよろ書いていたので誤字脱字などがあると思いますので気がついたら感想などをお願いします。

第七話「母親」

「さてと、事情を説明してもらおうで？　なのはちゃん、クラウド君？」

機動六課の隊長陣とレイチエルを前になのはとクラウドは立たされていた。

原因はもちろん、クラウドの能力が最近起きている事件の犯人と同じような能力を持っていることなのだが、それにもかかわらずクラウドは興味なさげに横を向き、なのはは自分から言い出すべきかどうかクラウドを見つめながら悩んでいた。

そんな様子にはやては大きいため息をつき、ゆっくりと立ち上がると周囲を見渡した。

「とりあえず、先にレイズちゃんの状況を説明すると今は安静にしてるから仕事には支障ないと思う。せやけど、しばらくはクラウド君と会うことは止めさせてもらう感じやな」

「あの、はやてちゃん。レイズちゃんはどうしてあんなことを…」

なのはの疑問は皮肉を言われたとはいえ助けしてくれたクラウドに対しての拒絶についてだった。

その言葉にはやては少し考え込むような仕草をしてから小さく答えた。

「これはレイズちゃんの個人的な問題やからな、悪いとは思ってねんけど私の口からは言えないんや」

そう言われてはそれ以上追及することはできないと判断した隊長陣

達は、再び視線をクラウドの方へと戻した。
それに対しても臆することなく、クラウドは無視をし続けずぐにしびれを切らしたヴィータの声が部屋に響いた。

「てめえ！ あたしらに隠し事して何のつもりなんだよ！！」

「むしろどうして俺がお前らに話さなくちゃいけない？ 俺の仕事は訓練の手伝いだけだ、他のことに協力するつもりは一切ない」

「だが、何も話さないことはお前の立場をどんどん悪くしていることに気が付いているのか？」

シグナムの言葉に反応したのはクラウドではなく、なのはだった。

「確かにクラウド君は襲撃してきたセクレトと似たような能力を持っているけれどだからって……」

「生き物を喰らって、その能力を得る……かな？」

確信の突いたレイチエルの突然の言葉になのは一瞬何も言えなくなるが、それに対してクラウドはつまらなさげに首肯した。

その答えに少なからず隊長陣は驚いた表情をするがレイチエルはいたって落ち着いて言葉を続けた。

「クラウドさんのその能力……今回の事件を起こしたセクレトと全く同じ能力なんだ。私たちに話してくれないかな？ その力のことを……」

口調こそは穏やかでお願いしているようではあったがその言葉の節々に答えることを強要するような力強さが見え隠れしていた。

そんな言葉にクラウドはわずかに考え込み、短く答えた。

「知らないな」

ここまでそう答えたクラウドに対して、隊長陣は少なからず不信感を持ち始めた。

その様子を感じたなのは慌てて口を開きかけるが何を言えばいいのか分からず、その口から言葉が発されることはなかった。

「クラウドさんのような能力を持つ人を私たちは「テイカー」って定義しているんだ……どんなことでもいい、どこでその能力を手に入れたのか、私たちの知らないテイカーの能力についてだっていい話してくれないかな？」

「……要するに、信用できないから全部話せてことなんだろう？」

クラウドの射抜くような視線と不快感を露わにした言動にレイチエルは僅かに口ごもってしまい、それを見たクラウドは小さくため息を吐くとそのまま部屋から出ていこうとした。

「クラウド君!？」

そんなクラウドの行動になのは慌てて呼び止めるがクラウドは僅かに足を止めただけで振り返ることもなく、なのはにしか聞こえないくらいの小さな声で答えた。

「だから言っただろ」

「え？」

「仲間なんてものに興味ないって」

それだけ言つとクラウドは何の未練もないかのようにそのまま部屋から立ち去っていった。

「ふっ！ はっ！ やあっ！」

すでに何回手に取ったか分からないほど手になじんでいる「スーヴェニア」をただただ無心に振るい続けた。

そうしないと落ち着かないから……そうしてないと、怖くて仕方ないから……

「っ！」

数えきれないほど腕を振るい続けて、再び構えなおそうとして私は腕を持ち上げるのにも苦勞するくらいに疲れていることに初めて気が付いた。

『もう昔の私とは違う……力も技術も、スーヴェニアだって……だから』

そんなことを思いながら手にしていたスーヴェニアをスタンバイモードへと移行して、一息ついたところで少し離れたところに座っている男の存在に気が付いた。

「……クラウド、アフェクトウス」

「なんだ？ 訓練の邪魔にはなっていないだろう？ それに訓練が終わったのならさっさと建物の中に戻ればいい」

興味なさげに答え、すぐに私に興味がなくなったように空を仰ぎ見はじめたこの男の行動に馬鹿にされているように感じた私は思わず声を荒げた。

「あなたには　関係ない!!」

疲れ切った体を無理やり動かしながらスーヴェニアを再び起動させて使い慣れているブレイドフォームにする。

冷静に考えれば分かることだった。

疲労困憊の状態なんかで勝てるほど相手は弱くないなんて……

「……」

力任せに振るった私の攻撃を軽々と避けたクラウドはスーヴェニアをはたき落して一気に距離を詰めた。

デバイスを払われ、カモロクに入らない状態で近すぎるくらいにまで詰められた私は体を強張らせ、何もできなくなってしまった。

「喰らってやるうか……?」

「……そんなこと、あなたにはできないでしょ」

目の前の男の言葉にイライラを隠そうともせずになんか言ったが、よくよく考えてみるとそんな気もした。

機動六課にはかなりの魔力や稀少^{レアスキル}技能を持っている人たちがいるのにこの男はそれを喰らおうともせずに馬鹿みたいに従っている。

そんなこと……する必要もないのに。

「お前の左胸にある『コア』を喰らえばお前の思考も能力も魔力も全て俺のものになるな……俺が成功例だからより確実に」

「っ!？」

「もう一度だけ聞く……喰らってやるっか？」

この男は本気だ……。

ここで私がやれるものならやってみると言えば容赦なくコアを喰らうだろう……そしてそれによって私は絶命する。

あいつと……お母さんを喰らったあいつと同じようにこの男は私を喰らいついて自分の一部としか思わないのだろう……

「い、や……」

死にたくない。

まだ生きていたい。

お母さんを食い殺したあいつを殺すまで死にたくない。

「何をしてるの!？ クラウド君!!」

「……白けたな」

ゾツとするほどの冷たい視線を私から逸らし、離れて行く男と入れ替わるように駆け寄ってきたのはあんなにも信用できない男を一番信じようとしている人だった。

「ホットミルクでいいかな？」

「あ……うん、ありがと」

出来たばかりのホットミルクを差し出すと、フレイズちゃんは小さく答えて受け取ったまま視線を落としていた。

話したくないのかもしれない……だけど、話し合わなくちゃ何もわからないから……

「ねえ、フレイズちゃ「なのはさんは……どうしてクラウドさんのことを信じようとしているんですか？」」

聞き出そうとする私の言葉を遮ったのは今まで何もしゃべらなかつたフレイズちゃんだった。

そんな本心からの言葉に私は一瞬だけ驚いたけれど、すぐに私の思っていることをそのまま口にした。

「理由もなく悪いことをする人なんていないよ、だから理由を聞いてあげればもつといい方法があるかもしれないでしょ？ だから私はクラウド君を信じてるんだ」

それは私が一人ぼっちだった時に感じたこと……好きで一人になる人なんて、嫌われようとする人なんていない。

ちゃんとそれには理由があつて……そうするしかないほど追いつめられていて……。

だから私はちゃんと話ししたいって思った。ちゃんと相手のことを理解して、一緒に考えて……一緒に解決したいから。

「だけど……あの人にそんな優しさなんて……」

「そうかな？ クラウド君は文句言ったりするけれど、私たちを手伝ってくれているよ？」

「……」

私の言葉を聞いて何も言わなくなったフレイズちゃんは沈黙を保ったまま、持っていたホットミルクを口に運んだ。

その様子を眺めてどれくらいたったのかは分からない……だけど、フレイズちゃんの中で何か決心がついたのか私の顔を見つめて口を開いた。

「なのはさんは……私が今から言う話を聞いてもあの人のことを信じられますか？」

その言葉に秘められていたのは悲しさだったのか、憤りだったのかは私には分からない。

それでも私は自分の想いを変えるつもりはなかったからフレイズちゃんの言葉に深く頷いた。

私とお母さん、それだけが私の家族だった。

どうしてなのかは分からない……だけど物心つくころにはそうだった。

たし、お母さんも仕事をこなしながら私の面倒を見てくれたから聞く必要のないことだと思っていた。

お母さんは優秀な魔導師だったから管理局でそれなりに稼げていたようで休みのときには私を色々なところへ連れて行ってくれた。そんな関係が……当たり前だった。

「どうして!？ 今日と一緒に遊びに行こうって約束したよ!？」

「ごめんね、フレイズ……事件の調査が終わったらすぐに戻ってくるから」

お母さんはそれだけ言うつと慌てながら調査の支度を始めた。

忙しいことは分かっている、好きで断ったわけじゃないことも分かっている……だけど、今日だけは……お母さんの誕生日プレゼントを渡そうと思っていた今日だけはそれがどうしても許せなかった。

「……」

だから私は　お母さんのデバイスを自分のポケットにしまった。今思えば何の意味もないことだったんだろう。

それでももしかしたらそれが原因でお母さんがすぐに帰ってくるかもしれない……そんな小さな期待をしていた。

「それじゃあ行ってくるね!」

「うん……気を付けて」

デバイスがないことに気が付かなかったお母さんはよっぽど時間がなかったのか準備を終えたとすぐに走って出て行ってしまった。

怒られたって構わない。ただ、お母さんが早く帰ってきさえしてくれれば……

そんなことを思っていた私に訃報が届いたのはお母さんを待って時

計を見ることが十回目に差し掛かったころだった。

「お母さんは、事件の調査に向かう前に襲われたらしいです。戦おうとしてもデバイスのなかったお母さんはそのまま喰われたんです……」

フレイズちゃんの話聞いて、そしてあの女の人に対する反応を見て一つの可能性に気が付いた。

「……もしかしてフレイズちゃんのお母さんって」「お察しの通り、さっきの事件で襲撃してきたセクレトです」

何とも言えないような表情を浮かべながら手にしていたデバイスを強く握りしめた。

「私があんなことをしなければ……素直にお母さんの帰りを待っていたらセクレトに喰われないで済んだんです」

自分がデバイスを隠したりしなければ……自分がお母さんのことをもっと分かってあげられたら……そんな思いがフレイズちゃんを突き動かして、縛り続けていた。

「だから私は……お母さんの代わりになれるように管理局で頑張ったんです。強い人の訓練をいっぱい見て、いっぱい訓練をこなして……そうしてジョーカーになったけれど、私はまだ弱いままなんだ……」

泣きそうな顔でフレイズちゃんは握りしめていたデバイスを見つめる。

銀色の十字架を模したようなデバイス……それをフレイズちゃんは祈るように、縋るように嗚咽交じりに言葉を紡いだ。

「私はまだ……お母さんにも、スーヴェニアにも認められてない。どんなに頑張ったって、どんなに償おうとしたって結局セクレトには勝てなかった……そうだよ、スーヴェニア」

『…………』

まるでフレイズちゃんの声が聞こえなかったかのようにスーヴェニアは何も答えずにただフレイズちゃんの手のひらで鈍く光るだけだった。

私の視線に気が付いたフレイズちゃんは涙を拭ういつものような笑顔を浮かべた。

「あはは、こんなことしても意味ないですけどね！　いつかスーヴェニアに、お母さんに認められる時が来たらいいな、なんて思っちゃうんです」

この子は辛いことを一人で抱えようとしている。それを誰にも頼ることが出来なくて、一人で必死に耐えようとしている。

「なのは……さん？」

「大丈夫だよ」

気がついたら私はフレイズちゃんを抱きしめていた。

どうしてなんて分からない……本当に無意識のうちにこの子を一人にさせちゃいけないって思ったら体が勝手に動いていた。

「フレイズちゃんを一人になんてさせない……私が一緒にいてあげるから……だから、お母さんやスーヴェニアに認められるように頑張ろう?」

「え……?」

「辛かったよね、寂しかったよね……ずっと一人ぼっちだったもんね」

「う……あ、つく……」

ゆっくりと、優しくフレイズちゃんの背中を叩きながら話しかけるとフレイズちゃんは今までたまっていたものがあふれ出したように嗚咽を漏らし始めた。

そして我慢しきれなくなつた分、大きな声で泣きはじめた。

そんなフレイズちゃんを私は何も言わずにただ優しく抱きしめ続けた。

「……お見苦しいところ見せてすみません」

「うっん、気にしなくていいよ」

泣きはじめてどれくらいの時間が経ったのかは分からないけれど冷静になれた私は慌ててなのはさんから離れて羞恥心から顔を赤くさせてしまった。

いくらなんでもあそこまで泣いた姿を誰かに見せるのは恥ずかしかった。

「フレイズちゃん、ちょっと提案があるんだけど……どうかな？」

「え？ なんですか？」

気をきかせてくれたのかは分からないけれどなのはさんが話題を変えてくれたことに心の中で感謝しながら話に便乗すると、なのはさんは予想もしなかったことを私に提案してきた。

「フレイズちゃんがよかったですらなんだけど、私の子どもにならないかな？ ヴィヴィオもお姉ちゃんがいたら喜ぶと思うんだ」

「……へ？」

一瞬……いや、しばらくなのはさんが何を言っているのか分からなかった。

だけどそれを理解した瞬間に私は慌てて首を横に振った。

「い、いやいや！ さすがにそういうのは迷惑になると思いますし、泣かせていただいただけで十分すぎるほどですよ！！」

「だけど、フレイズちゃんまた一人で抱え込んだりしちゃうと思うんだけど……」

「それは……」

否定はできなかった。

事実、地上部隊で働いていたころもナカジマ三佐から色々手助けを
してもらったけれどできるだけ自分でできることは自分でするつも
りだったからなのはさんからすれば、一人で抱え込んでいる部類に
入ってしまうかもしれない。

「駄目かな？」

「あ……う、でもお母さんって呼ぶのは……」

どうしてもその一線が越えられそうになかった。

お母さんのことを忘れる為にはさんをそう呼んでしまいそうで
怖かった。

そんな様子を感じ取ったのかなのはさんは少し考え込むと、優しい
笑顔を浮かべて私に話しかけてきた。

「それじゃ、ヴィヴィオと同じようになのはママなんてどうか？
フレイズちゃんのお母さんももちろん大切だけど、フレイズちゃ
んもまだまだ甘えられる相手がいるといいと思うんだ」

「それなら……嬉しいです。あ、なのはさんが迷惑じゃなければ！
！」

「私は構わないよ？ それじゃあ、試しに私のことを呼んでみよう
か」

「はい……え、えっと……」

いざ言ってみようとするど何故かうまく口にできず、私は何度も口
を開くものの言葉としては出せずにただ時間だけが過ぎていった。
けどそんな私を急かすこともなく、なのはさんはただ笑顔で私の
言葉を待ち続けた。

「な……」

「ん？」

「なのは……ママ」

顔から火が出るかと思うほど恥ずかしかった。

なのはさんが甘えていいと言ってくれたのは嬉しかった、けど実際にママと呼ぶとなると話は変わってきてしまう。

今までのなのはさんと呼んできたのに急になのはママと変えるのがどうしようもなく恥ずかしくて、だけど変な風に言ってしまったのがどうも心配になりながら私はなのはさんの方を恐る恐る見た。

「なに？ フレイズ」

「あ……」

なのはさんは、なのはママは私のことをフレイズと呼んできた。

今まで仕事仲間フレイズちゃんだったのが娘との関係だと認めてくれた。

それが私にはたまらないほど嬉しくて……

「ひっく、ぐず……」

「へ？ ええ！？ どうしたの！？ フレイズ！？」

私はまたなのはママの前で泣き出してしまった。

第七話「母親」(後書き)

フレイズはつまりヴィヴィオのように最強の後盾を手に入れたというわけですね……もしもフレイズにフラグを立ようとする人がいたら管理局の白い悪魔と戦うことn
(ディバインバスター)

恒例(?)の後書きコミック

【その能力】

レイチエル「クラウドさんのその能力……今回の事件を起こしたセクレトと全く同じ能力なんだ。私たちに話してくれないかな？ その力のことを……」

クラウド「知らないな」

レイチエル「そう、それなら仕方ないね……クラウドさんのような能力を持つ人を私たちは」

レイチエル「お腹が減ったよ早く何か食べさせて」能力者」って定義しているんだ」

全員「……ぶっ！ ……くっく」(必死で笑いを堪えている)「」

クラウド「こいつらをいまずぐ喰らってやるつか……」

【禁句】

クラウド「喰らってやるうか……?」

フレイズ「……そんなこと、あなたにはできないでしょ」

クラウド「さあな……だけどお前のその「貧相」な胸にある『コア』を
「

クラウド「く」　ゴハッ!？」

フレイズ「（全力殴打）」

なのは「何をしてるの!?! フレイズちゃん!?!」

フレイズ「この男は言ってはならないことを言っただけです……」

【禁句2】

なのは「理由もなく悪いことをする人なんていないよ……」

フレイズ「なのはさんあの男のことを信用しているんだ……」

フレイズ「まあ、私も少し冷静に判断するべきだったのかも
』

クラウド【貧相な胸に　　貧相な　　貧相　　】

フレイズ「あの人は悪です!?!」

なのは「いきなり断言してどうしたの!?!」

第八話「矛盾」(前書き)

新年最初の投稿なのに短い……
書きたいことはあるのにうまく纏められないという典型的な文才の
なさに泣けてきてしまう……

話は変わりますがskypeとかで画面共有すると実況みたいな
のができますね(おい

第八話「矛盾」

あの子とであつたのはお父さんとお母さんがちよつと出かけていた時のことだつた。

お母さんはいつものように買い物に、お父さんは珍しく出かけたけれどどうしてかは分からなかつた。

「……………」

なんとなく……………本当になんとかなく、お父さんの部屋を見たくなつた自分があることに気が付いた。

お父さんが仕事に打ち込み始めて、お母さんがそんな様子を見て距離を置くようになってから、一度も中に入ったことのない部屋に……………

「……………よし」

誰もいないことは分かっている。

すぐに入つて何事も無いようにするだけだつて分かりきつていゝ。

それでもなんだかいけないことをしているみたいで心臓は嫌でも激しく鼓動を打ち鳴らしていた。

手が汗ばんできたことを感じながらも何か急に急かされるようにお父さんの部屋の扉を開け部屋の中へと足を踏み入れた。

「……………意外と綺麗なんだ」

部屋に入つて最初に思ったこと……………それはお父さんの部屋のすつきりとした状況だつた。

何かの資料のようなものがいくつか机の上にあるとはいへ、部屋全体はしっかりと掃除が行き届いているようだつた。

そんなことを感じながら部屋を見回し、ふと後ろを振り返ると、そこには白い髪をした女の子が立っていた。

「ひゃうー!？」

予想もしなかった存在に情けない声を上げてしまったけれど相手はそんなことを気にすることもなくただこちらを見つめ続けた。

『金色の……眼、それに同じ年くらい……かな?』

だけど同時に疑問が浮かび上がってくる。

自分の家なのにこの見たこともない女の子はどうしてここにいるのだろうか?

泥棒と言っわけでもなさそうだし、知り合いと言っわけでもない……そんな得体のしれない少女……それでも不思議と嫌な感じはしなかった。

「悪い人……じゃないよね?」

「……」

少女は少し悩んだような表情をすると首を小さく振った。

悪い人、というわけなのだろうか? と言っても目の前の少女にそんな感じはないし、仮に本当に悪い人だったとしても素直に言うだろうか?

「えっと……あなたは どうしてここにいるの?」

「……」

その問いかけに少女は答えることなくただただ私を見つめた。

「もしかして、しゃべれないの？」
「……」

少女はすぐに頷くとそのまままた微動だにしなくなった。
とは言えそうなると彼女に聞けることはかなり狭まってくる……聞けたとしてもYesかNoで答えられるものじゃないといけないうらう。

「あなたは自分からここに来たの？」
「……」

答えはNoだった。
つまり、彼女は望んでここに来たというわけではないようだ。

「それじゃあ、誰かに連れてこられたの？」
「……」

再び少女は首を振る……
彼女は自分からこの家に入ってきたわけでも誰かに連れてこられたわけでもないらしい。
嘘をついている、と考えるのが妥当なところだろう。
とは言え、どうして嘘をつくのか、どちらが正しいのかが分からない今の状況ではこれ以上聞いても意味がないし、もうすぐお父さんやお母さんが帰ってきてもおかしくない時間だ。

「また、来てもいい？」
「……」

彼女はただ首を縦に振ってこたえた。
それだけのことだけれどいいところが一つもない自分にとって初め

てできた友達のように心を躍らせていた。

「な、なのはママ……やっぱり……」

「駄目。助けに来てくれたクラウド君にあんなに酷い事言っちゃったんだからちゃんと謝るまで許さないよ」

なのはママの言うことは分かる。

だけれどだからと言って自分が本心からそうできるかと言われると答えは否、という所だろう。

あの男は確かにお母さんとは何の関係もないけれど、私からお母さんを奪い去っていったやつと全く同じ能力という点ではどうしても謝罪できるとは思えない。

「フレイズお姉ちゃん、いけないことしたの？」

「そうだよヴィヴィオ。フレイズお姉ちゃん、クラウド君をいじめちゃったの……ちゃんと謝らないといけないよね？」

なのはママの言葉にヴィヴィオは怒っているとわんばかりの表情をして私を軽く叩くと注意してきた。

「駄目だよ！ フレイズお姉ちゃん、ちゃんと謝らなくちゃ！」

「うっ……」

なのはママに怒られるだけでも堪えたのに、ヴィヴィオにも怒られ

てしまうかと本当に謝ることしかできなくなりそうだった。もちろん謝らないといけないことは分かっている……だけど

「今ならクラウド君、訓練場の近くにいるはずだから」

それだけ言うとなのはママは私の背中を押し部屋の外に押しやった。

「頑張つてね」

……たぶん、暗に謝るまで戻ってきちゃ駄目って言っているんだろう。

無駄だと思いつつもヴィヴィオに視線を向けるけれど予想通り怒っているような表情を崩さなかったからここに残っているだけ無駄なんでしょう。

「……いつてきます」

「うん、いつてらっしゃい」

私はこれ以上ないくらいにどんよりとした気分で訓練場へと足を向けた。

とりあえずは訓練場に向かうけれど、未だにどう切り出せばいいのか、どう謝ればいいのかがまとまっていけない私にとって訓練場に向かう時間なんてあってないようなものだった。

「「ありがとうございます！」「」

声のした方を向くといつの間にか訓練場についていたのか、ティアナとスバルがクラウドにお礼を言っているところだった。ちょうど、訓練が終わったのかもしれない。

「……」

お礼を言う二人の姿なんて目にも入らなかったかのようにクラウドは何も言わずにそのまま私の方へと向かって歩きはじめた。

「っ!?!?」

私は慌ててどこかに隠れようとするけれど、そんなに都合よく隠れる場所があるわけもなく、すぐに私の目の前にクラウドが立ち止まった。

「あ、あの……」

「どけ、そこにいられると迷惑だ」

あまりの言葉に思わずムツとしそうになったけれど、謝りに来たことを必死に心の中で復唱した私はなんとか怒りを抑え、なるべく友好的に見えるように笑顔を浮かべた。

「こ、この前は私が悪かったと思ってるの……」

「この前?」

私の言葉にクラウドは何のことも理解できなかったのか少しだけ不思議そうな顔をしながら聞き返してきた。

「うん……助けてくれたのに、あんなこと言っちゃって……」

今更ながら振り返ってみると、本当に酷いと思う……折角助けられたのにあそこまで拒絶しなかったってよかったんじゃないか? っ
て思うほどに。

そこまで言って、クラウドはようやく理解したのか「ああ」と短く答えながら私の方を向いた。

「別にそんなこと気にしていない……お前が俺を嫌おうが、憎もうが俺には関係のないことだ」

「だけど……一応私たち、仲間でしょ？」

「そんなものはお前たちが勝手に言っているだけだ」

冷淡な言葉で返すと、クラウドはそれ以上言うことがないとも言わんばかりに私をどけてそのまま建物の中に戻っていきこうとした。

「勝手なこと言わないでよ！　なのはママがどれだけあんたのこと心配したと思って……」

「なのはママ？」

「あつ……」

わざわざ言いつもりはなかったけれど、クラウドに指摘されて私は初めてなのはママのことを話してしまったことを自覚した。

「ふん、大方なのはに強制させられたんだろう？　話は分かった、

お前の謝罪は確かに受けた」

「強制なんて」

それ以上興味がなくなっただかのようにクラウドは改めて機動六課の中へと入っていった。

『だからあんな奴になんて……』

そんなことを思いながらもとりあえずはなのはママに言われた通り謝ることができて私は小さく息を吐いた。

「あ、クラウド君……偶然だね」

「そうだな、あいつに謝罪されてすぐに会うなんてすごい偶然だ」
「にははは……やっぱり？」

クラウドは呆れたようにため息をつくとそのまま廊下の壁に背を預けた。

その仕草になのはは驚きながらも少し嬉しそうな顔をしてクラウドのすぐ隣に立った。

「話、聞いてくれるようになっただね」

「付きまとわれても迷惑なだけだ、用があるならさっさと済ませろ」

不機嫌そうな顔をするクラウドに対して、なのはは笑顔を絶やさずに口を開いた。

「でも話は聞いてくれたでしょ？ それだけでも十分嬉しいよ」

あまりにも無邪気な笑顔にクラウドは一瞬呆気にとられ、そのまま呆れたように顔を手で覆いながら俯いた。

その様子を見たなのはは不思議そうな顔をするが、それに構うことなくクラウドはなのはに話しかけた。

「お前は どうして……いや」

口にしかけてからクラウドは一瞬だけ逡巡し、再び口を開いた。

「それが……なのはなんだよな」

その言葉の意味が分からずになのは少しだけ首を傾げるが、クラウドの中ではすでに解決したのか何も言わずにただ沈黙を守った。しばらくの間、二人の間に沈黙が続くとその無意味さを感じたのかクラウドはゆっくりと立ち上がった。

「話が終わったのなら俺は部屋に戻るが……構わないな？」

「ま、待って！」

それだけ言って返答も待たずに立ち去ろうとするクラウドをなのは慌てて呼び止めた。

なのはの言葉を聞いてクラウドは止まったものの未だになのは何を言うべきか考えていた。

その様子にクラウドは何も言うことはないだろうと判断し、そのまま進もうとしたが直前でなのは口を開いた。

「クラウド君の能力の事なんだけど……」

またその話が……と思ったのか、クラウドは忌々しそうな顔を隠しもせずになのはに向けたが、その言葉の続きはクラウドの予想したものと異なっていた。

「どうしてクラウド君は……私たちを喰らわないの？」

「……なんだと？」

なのはが感じたのはクラウドの能力を知ってからの違和感だった。

喰らった相手の能力を得る……だけどクラウドはまるで戒めのように人を喰らうことを拒絶している。

喰らうことで新たに魔導師としての力が手に入るにもかかわらずだ。

「こういうのも変かもしれないけど、私たちの魔力は結構あるんだよ？ それなのに動物たちは喰らうのにどうして私たちのことは喰らわないのかな……って思ったんだけど」

「この能力が嫌いだからだ、それに……わざわざ化け物に堕ちるつもりもない」

クラウドはあくまで自分の能力を否定し、そして人であることを望んだ。

しかし、だからこそなのは疑問に思った。

「クラウド君がその能力が嫌いなことも、理由も何となくだけ分かるよ。だけど、それならどうしてその能力に頼って一人で生きていこうとするの？」

一人で生きていこうとしなければそもそも自分の嫌う能力に頼る必要もない。

普通に暮らしていくだけならば孤独に生きていく必要なんてないのだから。

「それは……」

なのはの問いかけにクラウドは僅かに悩んだがすぐに興味なさげな声で答えた。

「なのはには関係のないことだ、俺が何に頼ろうが関係ないだろう？」

今まで以上に冷淡に返したクラウドの言葉になのははそれ以上何も
言えなくなり、静かに俯くしかなかった。
そんななのは姿を見てクラウドは何も言わずにそのままその場を
立ち去った。

【どうしてその能力に頼って一人で生きていこうとするの？】

なのはと別れてからもその言葉が頭から離れない。
それは自分自身心のどこかで違和感に思っていたことなのか、それ
ともただ単になのはに関係のないことをわざわざ指摘されて腹立た
しかったのかは分からない。

『…………俺はどうしてこんな能力を持っているんだ？』

この能力が嫌いなのは紛れもない俺の本心だ。

人間でありながら人間とはかけ離れた化け物の力。

別にこんな能力が欲しかったわけでも、憧れたわけでもない。

『こんな能力のせいで俺は…………』

そこまで考えたところで思わず自虐的な笑みがこぼれる。

「こんな能力のせいで…………？ どうしたって言うんだ？ 誰かと一

緒にいたかったとでも？」

そんなわけがない、俺は誰かと一緒にいるのなんてごめんだし、なのはみたいに関わってこようとする奴が大嫌いだ。

大抵の奴ならすぐに俺に関わることを止めようとするんだろうが、なのはだけは他のやつら以上に強引に関わってこようとする。

俺が一人でいたいと言ってもお構いなしに、だ。

「……結局は仕事だけの付き合いだ、それ以上付き合い合う必要はないか」

無理やり自分の中で結論付けた俺は誰に会うでもなく、そのまま自分に割り振られた部屋へと戻っていった。

その頃にはもうすでに、なのはに問いかけられた言葉は頭から離れ、さっきまでの不快な感覚は残ってはいなかった。

第八話「矛盾」(後書き)

レポートを少しずつつ付けつつの執筆だったので色々粗が目立って
しょうがない。

折角の冬休みも課題に追われていてまともに執筆ができなかったの
が痛すぎる……

時間がかかりそうならプロットとか書いておいた方がいいのかな？

安定(?)の後書きコミック

(表現がお子様は見ちゃ駄目な感じなのでピュアな方はバック推奨、
キャラ崩壊も酷いのでそれが嫌な人もバック推奨)

【ごめんなさい】

フレイズ「な、なのはママ、やっぱり……」

なのは「駄目、ちゃんと謝るまで許さないよ？」

ヴィヴィオ「フレイズお姉ちゃん、いけないことしたの」

なのは「そっくだよヴィヴィオ悪いことしたら謝らないといけないよね？」

ヴィヴィオ「……（想起中）」

なのは【ちよっとだけ、痛いノ我慢デキル？】

ヴィヴィオ「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……！」
なのは「ええっ！？　なんでヴィヴィオが謝るの！？」

【誰もが思ったはず？】

クラウド「話が終わったのなら俺は部屋に戻るが……構わない？」
なのは「ま、待って！」

なのは「クラウド君の能力の事なんだけど……」

クラウド「……またその話か」

なのは「どうして触手とかなんか卑猥なものをよく使ってるの！？

もしかしてむっつ……」

クラウド「それ以上言ったら喰らうぞ」

なのは「性的な意味ですね、分かりま……」

クラウド「（怒）」

【クラウドは考えることを放棄した】

なのは【どうしてそんな卑猥な能力に頼って生きていくの！？】

クラウド「訳が分からん……もともと何を考えて生きているのか分からなかったけど余計にわからなくなってきたぞ……」

ヴァイス「おっ、クラウドじゃねえか」

クラウド「誰だ？　こいつ……」

ヴァイス「あゝ、憶えてないか？　食堂で大食い対決を止めようとしたんだけど……」

クラウド「ああ、あの時の……」

クラウド「で？ 何の用だ？」

ヴァイス「いや、大したことじゃねえんだが……」

ヴァイス「お前だったら触手の凌辱系を持つてるかなって思ってな
！」

クラウド「……結局は仕事だけの付き合いだ、これ以上付き合い合
う必要はないか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8434s/>

魔法少女リリカルなのはCordis

2012年1月11日00時54分発行